
IS インフィニット・ストラトス 千冬と一夏と秋五

ぐぎゆる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 千冬と一夏と秋五

【Nコード】

N1806S

【作者名】

ぐぎゆる

【あらすじ】

西暦2364年。ELSとの対話を成功させた刹那が救った世界はイノベーターと人類が共に生きる思想的な世界へとその歩みを進めていた。だが、そんな世界にも悪は存在していた。一人の少年が持ち帰った設計図。襲われるアジト。そこから物語は始まる。そして・・・少年は爆発の光に何を見るのか。

この作品はプロローグの途中までOOの世界です。途中からはISの世界です。もしこの設定に嫌悪感を感じる方は戻るをクリック

していただくことをおすすめします

プロローグ 少年兵と設計図と新しい世界（前書き）

えーこんにちははぐぎゅるです

前々から夢で構想を練っていたIS話を投稿したいとおもいます
読んでいってくれれば幸いです

プロローグ 少年兵と設計図と新しい世界

西暦2364年。ELSとの対話を成功させた刹那が救った世界はイノベーターと人類が共に生きる理想的な世界へとその歩みを進めていた。だが、どんな世界にも悪というものは存在する。

宇宙ステーション近くの隕石内基地

「おい！さっきの話は本当か！」

「ああ、あのガキやってくれたぜ！」

「しかし、まさか本当に『ガンダム』の設計図をかつぱらってくるなんてよ」

二人の男が進む先には何人もの男達に囲まれている年端もいかない少年。およそ6〜7歳だろう

少し前からここに入り浸るようになり、先日、「ソレスタルビーイングから設計図を盗む」といったきり一週間帰ってこなかった。俺達はもちろん、この人間はもう死んでいるものと思っていた。だが、帰ってきた。設計図を持ってきて

「おい、ガキ。設計図を見せてみる」

男が言うと、少年は一冊の束を渡す。そこには『GNT-0000
00 Quanta』とかかれており、その詳細な情報と設計図
が記されていた

「ククク……これさえあれば一発で戦乱の時代に逆戻りだぜ」

「そうだな……おまけに他のガンダムの設計図までありやがる。最
高だぜ、このガキ」

男が少年の頭を撫でる。だが少年は表情を変えることなくその場を
去る

「けっ、かわいくねえガキだ」

「そう言っつてやるな、いまじゃ俺達の英雄だぜ？」

ここにいる人間はみな、平和な世界に飽き飽きしている奴らで、戦
乱を起こし、再び60年以上前の世界に戻す。それを目標としていた

そして、数日後

「おい！あのガキまたやりやがった！」

「今度はなんだ？」

「ソレスタルビーイングからダブルオークアンタに積んであった新型GNドライブを二つもかつさらってきやがった！」

「なんだ……いいニュースじゃねえか」

「ばかやろう！あのガキ、GNドライブと一緒に敵をわんさか連れてきやがったんだよ！」

「尾けられたのか、あのガキ」

そこに少年がやってきた

「すまない。尾けられてしまった」

「ったく……てめえだけでも脱出しろ。そのGNドライブとっしょにな」

「おら、こつちこい！」

少年は男に連れられてGNドライブの入っている脱出ポッドに詰め込まれた

「生きるよ、純粹種！」

少年は首をかしげる

「どうやらお前はイノベーターの中でも純粹種と呼ばれる者らしい。そしてそのGNドライブを積んだダブルオークアンタは純粹種のイノベーターに反応してGN粒子を爆発的に放出することができるらしい。ガキ、いつかそれで」

ダアンツ！

男が撃たれる。少年は表情を変えずに撃った宇宙服を着た男を見る。そして、脱出ポッドが出ると同時に基地が爆発を始めた。少年はポッドごと爆発に巻き込まれ　意識を失った

撃たれた男が最後に何を言いたかったのか、それは……分からなかった

????の研究所

「ん、今日も暇だねえ」

ところ変わってここはとある場所にある研究所

そこで一人、研究をしている篠ノ之東はつい最近、ISというマルチフォーム・スーツを開発した自称・天才。

今日も暇つぶしに何かを組み立てたり、ばらしたり。自分が起こしたとはいえ『白騎士事件』で身を隠さなければいけなくなったのは唯一のミスかなあと最近思っていたりする

今日の暇潰し、『1000/1スケール セラミック合金製 白騎士』を作ろうと意気込んだそのとき

束の前に、眩しすぎるほどの閃光がほとばしる

「おお、なになに？宇宙人の襲来か!？」

閃光が収まると、そこには一人の少年と、胸部とシールドに謎の動力炉を搭載した青と白を基調とした全身装甲フルスキンのIS、そして丸い物体が二つ転がっていた

「おやおや？ 迷い人か？ にしては変なISを持つてるんだねえ」

謎のISにコードを刺して調べてみる。どうやらコアはあるが完成してはないようだ
エネルギーバイパスを見ると、どうやら、二つの謎の動力炉とコアは密接につながっているようだ

「ん〜、とりあえず起こすか。てりゃ〜」

少年の足を掴んでぶらぶらと振ってみる。暫くすれば目を覚ましたようで逆さまになりながら辺りをキョロキョロと見渡している

「お〜、起きたねえ、君、誰？」

少年は一言「名前はない」といった。変わった子だねえ

「まあ、いいや、これはどこでもらったの？」

少年は首を振る。どうやら知らないようだ

「まだ完成してないようだけど……させちゃていいよねえ？」

少年は頷く、ん、よし。この子はちーちゃんに預けよう

「よし、少年。そこの丸い物体を抱えて……じゃ、付いてきな」

日本・織斑邸前

「じゃあ、この手紙を『織斑千冬』って人に渡したらいいからねえ、きつと何とかしてくれるよ」

多分ね

「わかった、いろいろとすまない」

「べつにいーよ、じゃISが完成したら送るからねえ」

そういつて東はすたころとどこかに消えていった

まだ来ないようなので、丸い物体を眺めていると、突然

「ハロ、ハロ」

いきなり喋りだしたので驚いた

「そういえば、ソレスタルビーイングの一人がこんなAI搭載型のロボットを持っていたと聞いたが……」

「ロックオン、ロックオン」

そいつの名はロックオン・ストラトス。ソレスタルビーイングの狙撃手だった男か

「ん？お前、そこで何をしている」

振り向くと、利発そうな女性が立っていた

「あなたが、織斑千冬か？」

「そうだが、お前は誰だ？」

「テガミ、テガミ」

突然、ハ口が喋ったので、織斑千冬は驚いていた
テガミ……そうだ、これを渡さなければ

「すまない、篠ノ之束からの手紙だ」

「あのバカからか？」

その場で手紙を読み……ため息をつく

「まったく、どうやらアイツはお前を私達の家族にするらしい」

は？

束は、責任をこの織斑千冬に押し付けたようだ

「お前は名前がないらしいな……よし『秋五』^{あきご}でいいだろう」

「……わかった」

「よし、ではよろしくな。もう知っていると思うが、私は織斑千冬^{おじしまちふゆ}だ」

「ああ、よろしくな」

こうして、少し変わった弟が織斑家に加わった

人物・IS設定(前書き)

なにか、おかしな点について気付いた方はご指摘くださいませ

人物・IS設定

主人公 名前無し（プロローグで織斑秋五おりむらしゅごとなる）

年齢 初登場時六歳

現在 十五歳

容姿 黒髪に鋭い目つき。瞳は同じく黒でアニメキャラで言えば『ヒイロ・ユイ』な感じ

西暦2358年の九月生まれで、イノベーターの純粹種。いつも無表情で饒舌に喋ることはない。なぜ戦争を起こそうとする組織に居たのかは不明だが、ダブルオークアンタのGNドライブを強奪したことによりソレスタルビーイングの襲撃を受けて組織が壊滅。GNドライブと共に脱出を図るも、基地の爆発にGNドライブを搭載した脱出ポッドごと巻き込まれる。そして、何らかの力が働き、ISの存在する世界に飛ばされてしまう。

IS

織斑秋五専用IS・ダブルオークアンタ

形式番号 GNT・0000 QAN[T]

秋五が前の世界で強奪したダブルオークアンタの設計図とGNドラ

イブが変化し一体のISとなった。なお、変化した理由は不明。第五世代型IS（篠ノ之東談）で、最初は全スペック50パーセント抑えられており、第三世代型ほどの能力しか発揮できない。コアは既に作られていたが、完成していなかっただため束が手を加えて、完成させた。フルスペック時には戦闘時に次元ゲートを使わずに短距離の量子テレポートが可能（トランザム時・オリ設定）。八口を抱えて展開した際に、GNシールドにあるGNドライブに八口が組み込まれてしまっている（オリ設定）

武装

GNソード？ - エクシアのGNソードから通算5代目のモデル形状やライフルモードへの変形方式はGNソードIEIを踏襲しているが、刀身全体がGNソード？と同じクリアグリーンの半透明素材で成形されている。GNソードビット6基を刀身に合体させることで、ソードモードはバスターソード、ライフルモードはバスターライフルへとそれぞれ強化される。バスターライフルモードでは、ダブルオーライザーと同じくライザーソードの使用も可能。

GNシールド - 太陽炉の1基を内蔵する専用シールド。背中のアームで左肩側に連結され、胸部側の太陽炉とツインドライブを構築する。アームは柔軟に可動し、左腕の動きを妨げることなく広い防御範囲を確保している。これに関連して、左肩の装甲も右肩側の先端を切り欠いた形状をしている。GNソードビットのキャリアを兼ねており、内蔵された太陽炉から粒子を急速充填することができる。表面には粒子散布用の開閉カバーが備えられ、上部には迎撃用のGNビームガンを内蔵している。

GNソードビット - GNソード？と同素材の刃が採用されたビット兵器。形状と大きさの異なるA、B、Cの3種のビットを各2

基づつ、計6基装備する。各ビットに手持ち用のグリップが格納されており、AビットとBビットは連結させて1本の長剣としても使用される。また、Cビットのみ先端にビームサーベルを発生させる機能を有する。全ビットを円環状に配置することで、任意の範囲にGNフィールドを展開する。この展開方式はビット自体が攻撃を受ける必要がないため、他機のビットに比べ撃墜されるリスクが低い。また、量子テレポート時には次元ゲートを形成する。

GNシールドビット - 遠隔操作が可能なGNシールド。形状はケルデイムのもと同じで、カラーリングは青に変更されている。シールドを自在に分散、密集させることで、多方向からの攻撃に対応できるほか、僚機や母艦の防御にも使用できる。シールドに4基、背中の太陽炉に5基の計9基が装備され、八口が全ての制御を担当する。各ビットにビーム砲が内蔵されており、4基を格子状に配置した「アサルトモード」では、より強力なビームを発射することができる。ビットの貯蔵粒子が少なくなった場合、太陽炉付近のプラットフォームやシールドにマウントすることで急速なチャージが行われ、素早い再展開が可能となる。(オリ設定)

なお、現在このISは「トランザムシステム」は使えるが、「トランザムバースト」及び「クアンタムシステム」、「クアンタムバースト」は使用不可能

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力 「トランザムシステム」 - オリジナルの太陽炉に予め組み込まれていたシステム。機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで、一定時間スペックを3倍以上に上げることができる。しかし、このシステムは大量のGN粒子を消費するため、使用後は粒子の再チャージまで機体性能が大幅に低下するなど、諸刃の剣である。

人物・IS設定（後書き）

間違いがありましたらどんどんいつてください

GNシールドビットを武装に追加

第一話 秋五、IS学園に入学する（前書き）

少しいじりました。

ご意見あれば随時、どうぞ！

第一話 秋五、IS学園に入学する

「……………」

俺は今、日本の私立校に向かっている。

小学校を卒業してから千冬姉さんについていき、3年でいろんな国を周った。千冬姉さんは途中、第二回 モンド・グロツソに出るため、離れたので実質は俺一人だった。量産機IS、シェア世界第三位のデュノア社があるフランス。両親を無くし、一人家を守っている少女がいると聞き、立ち寄ったオルコット邸のあるイギリス、部隊長から部隊員までが、全員眼帯をしているIS三機を持つ国の最強部隊である『眼帯をした黒ウサギ』が部隊章の特殊部隊があるドイツなど……世界中を旅した、そして、帰る途中、束姉さん（そう呼べと強要された）からの手紙が届き

『しゅうくんの高校の受験先、探しておいたから。優しいね、私っ！』

……何を企んでいるのかわからないが、この時期に受験を受けれるのはこの『藍越学園』だけだろう。卒業後の進路のケアも充実している。優良企業も多い。食っていくには申し分ない。

「あまり、千冬姉さんに迷惑かけるわけにはいかないからな」

俺の家族には親が居ないらしい。俺が織斑家に引き取られたときにはすでに居なかった。千冬姉さん曰く、『昔、両親に捨てられてな気分になっても私や一夏に聞くなよ？この家の禁句だからな』だそう。そのために、千冬姉さんが養ってくれていたが、そろそろ俺も引け目を感じる

俺が電車に乗り込んだところで、懐かしい顔を見つける

「……………一夏か？」

「え……………？おまえ、秋五か!？」

織斑一夏おりむらいちか。俺の義兄（歳は同じ）。いつもはイマイチな男だが、やるときはやる男だ

「で、お前はここで何をしている？」

「これから入試なんだよ」

「奇遇だな、俺もだ」

「……………まさか藍越学園か？」

「よくわかったな」

「いやー、あそこさあ卒業した後の就職先のケアがしっかりしてるし、就職先がみんな優良企業なんだよ。いやーこれで千冬姉に楽さ

せてやれるってもんぞ」

「どうやら、俺と同じ考えらしい、確かに千冬姉さんの稼ぎはいい、だがそれが、かえって無理をさせているように思えて仕方がない。そう思い、ここに決めたのだ」

「……………受験先の紹介が束姉さんということを除けば感謝してもしきれない。」

「あの人はいい意味でも悪い意味でも純粹で何を考えているかわからないところがあるからな」

「そんなこんなで、目的の多目的ホールに着いた。典型的な、『名前は知られているがどこにあるかわからない』と言う名の公共事業の産物である」

「えーと……………あれ？これ、どうやって二階に行くんだ？」

「おい、あまり時間がないぞ。大丈夫なのか？」

「……………ま、何とかなるだろ」

「まったく、一夏は相変わらず行き当たりばったりだな」

「一夏は子供のころから困ったことになるよ、『なんとかなる』で乗り切ってきた男だ」

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は、それでだいたい正

解なんだ」

さて、俺は不正解な気がするが……？

そんな俺の考えを知ってか知らずかドアを開ける

「あー、君、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ四時までしか借りられないからやりにくいっ
たらないわ。まったく、何考えて」

部屋に入った途端、神経質そうな三十代後半の女性教師に言われる。どうも相当忙しいらしいのか、その忙しさで判断能力が鈍っているのか……おそらくは両方、俺達の顔も見ずにはっぱつと指示だけ出して出て行った

着替え……？入試に着替えが必要なのか？

そのとき、俺の頭に束姉さんのしたり顔が浮かぶ

…まさかな

一夏がカーテンを開けると、そこには『城に飾ってある中世の鎧』
のような物体が鎮座していた
俺はそれを知っている

これは

アイエス
『IS』

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ

しかし、『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持て余した機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた 所謂、飛行パワードスーツだ

だが、この『IS』には致命的な欠陥がある。それゆえに俺達には何の意味もなさない

「男は使えないんだよな、確か」

「ああ」

そう、女にしか使えない。女以外には、この機械は反応しないのだこの多目的ホールの一室にISがある。入試を受ける学校は藍越学園………なるほどな

そう何か確信めいたものを感じていると、不意に一夏がISに触れる

「「!!!?!」」

一夏が触れた瞬間、ISが起動した、俺も驚いたが、一番驚いているのは一夏。何が何だかわからないといった感じだ

それから、先ほどの女性教師が入ってきては大慌てで誰かと連絡を取り、その後、不意に手が触れた俺も起動させてしまう。それがわかればまた大騒ぎ。そして、あれよあれよというまに、IS学園の入学が決まった

「……………なあ、秋五」

「なんだ」

「ISって……………女しか使えないんだよな？」

「ああ。ついさっき、俺たちが動かしたから、『女しか』ではないがな」

「……………ってことはクラスは女子だらけってことか？」

「そうなるな」

そのあと、なぜか一夏がもたえるが、俺は気にしない
たかが女子だ。気にすることまるまい

そして、日にちは過ぎて

入学式

俺と一夏は共に一年一組になった

ここから、俺達の物語が始まる

第二話 クラスメイトは全員女

「みんな揃ってますねー、それじゃ、S H Rはじめますよー」
ショートホームルーム

黒板の前でニコリと微笑む女性。副担任の山田真耶先生。やまだまぢ先生の自己紹介を終えて、S H Rを始めるところであつた。印象は子供っぽい人。たまにずれる眼鏡を直している

どう見ても、中学生にしか見えないんだが……？

「えー、それではみなさん一年間よろしくお願いしますね」

だが、返事はない。どうやらその理由は俺達にあるらしい。このいたたまれない空気に、山田先生は苦笑いで切り出す

「じゃ、じゃあ自己紹介をしましょうか、出席番号順で」

うるたえた先生が少し哀れに見える

一夏は一夏で、この空気の中でうるたえている

そして、箒の方を見る。が、どうやら見放されたようだ

そんなことをしているからだろうか、山田先生が声をかけるのにも
気づかない

「織斑くん、織斑一夏くんっ！」

「は、はいっ!?!」

やっとのことで返事をしたのだが、裏返った声で返事をしてしまう一夏。

周りからも、クスクスと笑われてしまう始末。

何をやっているんだ、一夏

「あ、あの、大きな声を出してゴメンね?でも、『あ』から始まって『お』の織斑くんなんだよね?だから、自己紹介してくれるかな?だ、ダメかな?」

山田先生が頭を下げている。生徒に頭を下げるのは教師のすることではないと思うが。それとも、お願いするときには頭を下げる癖でもついているのだろうか?

「いや、あのそんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しますから、落ち着いてください先生」

「ほ、本当ですか?本当ですね!約束ですよ。絶対ですよ!」

何も、そこまで言わなくても、一夏ならやるだろうに。

山田先生にせがまれて、慌てるように頷き、しっかりと立ち、後ろを振り向く一夏
その表情は緊張の面持ちである。よく見ると、額に少し汗をかいて
いるようだ

「えー、えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏は、深く一礼をした後に、頭を上げて目だけを動かし辺りを見
渡す

その表情は、『この後に何言っているかわかんねーっ！』といった
表情だった。額から汗が吹き出している。俺もチラ見で横の生徒の
表情を見ると『え？これで終わり？ふふっ、まだあるわよね？』み
たいな表情だったかは定かではない。チラ見だったからな。

さて、どうするんだ、一夏？

クラス中の視線が一夏に集まり、そして

「以上です」

『ガタタタッ！』

思わずずっとこける女子数名。どうやら期待をしていたようだが、そ
こで終わらせるとはな。流石、一夏だ

「あ、あのー……」

山田先生が声をかける。その声は涙声が混じっている。とそこに

スパアンツ!!!

「いつ　　!?!」

一夏の頭からいい音が鳴った。頭を出席簿ではたかれたようだ、どうやら俺もよく知っている人が来た

「げえ…っ! 関羽!?!」

スパアンツ!!!

再び叩かれる頭。その音はかなり大きいのでみんなも驚いているもっと強く叩けば、拳銃の音に似たものが出せそうだ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

確かに、俺にはドラの音は聞こえないな

尤も、一夏本人にはジャンジャン聞こえているのだろうが。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

さっきまでのおどおどした態度から一転、少し熱っぽいくらいの声と視線で姉さんに応えている

ああ、あれか。憧れているといったところか。この手の人達はかなり見てきたからな。

姉さんと世界を回っていた時に何人もの熱狂的なファンを見てきた俺は山田先生の反応に特に驚きはなかった

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者の育てるのが私の仕事だ。私の言うことは良く聴き、よく理解しろ。出来ないものは出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私能言うことはよく聞け。そして、学園では織斑先生と呼べ。いいな？」

相変わらずだ。姉さんらしいといえば姉さんらしいな
そして、俺は耳を塞ぐ。

あ、一夏。耳をふさがない

「きゃああああっ！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

別に九州でも沖縄でもどこでもいいが。

それにしても相変わらずの人気だ。一夏か、ポカンとしている。どうやらこの雰囲気についていけないらしい。そして、耳栓は必要がなかったらしい。

「……………まったく。毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。其れとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

これが演技ではなく本気で鬱陶しがっている
そして、この姉さんの台詞に沸き立つ女子達。
この光景も久しぶりに見たな。それにしても…………

……………さすがにすごいな

「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

スパアンツ!!!

その思惑通りに一夏の頭に出席簿が叩きつけられる、頭を叩かれると脳細胞が五千個死ぬとか死なないとか。それだとすでに一万五千個は死んでいる結果になる

大丈夫か、一夏の頭は……？

しかし、このやり取りで一夏が姉さんと兄弟ということがバレた

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男で『IS』を動かせるっていうのも、それが関係して……？」

「ああっ、いいなあっ。かわってほしいなあっ」

各人、色々な意見を交わす。最後のはただの願望に聞こえるが俺達は今、世界で二人だけの『IS』を使える男としてここ、特殊国立高等学校 IS学園にいる

IS学園とは

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資

金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、党機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つものには無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。

IS運用協定『IS操縦者育成機関について』の項より抜粋

つまり、日本人である篠ノ之東が製作したISによって世界は混乱したので責任を持って人材管理と育成のための機関を作り、その技術は平等に差し出すこと。運用資金は日本国が出すこと。ということ

確かにISを作ったのは日本人だが、やり口がかなり強引だ。と言っても決まってしまったことをどうこう言ってもしょうがないのだがそろそろ、騒がしくなってきた生徒たちを、千冬姉さんが一喝する

「静かにせんか！全く、初日から騒がしい……さっさと自己紹介を進めろ」

……そういえば次は俺だな

それに気づき、俺は立ち上がる

これはなかなか……視線が俺に一斉に集まる。

もう少し、手加減しろ　　と言っても無駄なのだろうな

「織斑秋五だ、そこにいる織斑先生と織斑一夏の弟だ。兄弟共々、何かと世話をかけるがよろしく頼む」

再び辺りがざわめく。

それもそのはずで、ニュースで『世界で唯一、ISを動かせる兄弟』として話題を呼んだからだ。あの時はすごく騒がれたものだ。そして、今も……

そんな、再び騒ぎ始めた生徒たちを姉さんが再び一喝する

「喧しい！大人しく自己紹介を進めることも出来んのか？次に騒がしくしたら校庭十周だ、覚えておけ」

さすがに、校庭十周は嫌なのか、ピタリと静かになって自己紹介を再開させた。

自己紹介は、滞りなく進み……

「うむ。ではSHRを終わる。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

これも、千冬姉さんらしさ……ということにしておこう

「では、授業を始める」

こうして、千冬姉さんの号令で授業が始まった
そして、一夏と秋五に恐怖の休み時間が近づいていた。

第三話 セシリア・オルコット

休み時間

「あー……」

隣では一夏が机に突っ伏して唸っている。どうやら授業についていけないらしい

一時間目のIS基礎理論の授業が終わり、今は休み時間

因みに、このIS学園は徹底的にIS関連の教育をするために、入学式当日から授業がある

学校の案内は、千冬姉さん曰く、『地図を見る』とのこと

普通の観点から見るとあまりよろしくはない。だが、そんなことより気になるのがこの学園での女子の視線

本当に、これはどうしたものか……

俺と一夏以外全員が女子。しかも、クラスだけでなく学園全体がそうなのだ

因みに『世界でISを動かせるただ二人の男』というのは世界的にもニュースなった。

当然のことながら、世界各国の大統領や国王から隣の女子まで俺たちのことを知っている

そのおかげで現在、廊下には他のクラスの女子に二年、三年の先輩

が詰め掛けている。空いた窓や扉から入る視線は全て一夏か俺に向けられている。正に『針のむしろ』だ

だが、一向に話しかけてこない。女子だけの空間に慣れてしまっているせいかもしれない

聞いた話では、IS学園は世界にここ一箇所しかなく、ここに入学するために事前学習としてIS学習を授業に組み込む学校も多い。そして、その学校は

『百パーセント女子校』

らしいのだ。それが理由なのかは解らないが、この学園の女子は男子に免疫が無いのだ

ISが世に出て十年。世界は激変した

それまでの戦闘兵器は無力になったために、世界の軍事バランスが崩壊

そして開発したのが日本人ということで、日本は独占的にISの技術を保有していた

それに危機感を抱いた各諸国は『アラスカ条約』を制定。IS技術の独占を防止し、技術の共有などが決められた

そうすると、今度はIS操縦者の数でその国の有事の際の防御力（軍事力）へと繋がる

操縦者は当然女 となると、どの国も女性優遇制度を施行した

こうして『女性＝偉い』という構図が世界に浸透し、女尊男卑社会

が完成した

だが突然、対等な立場の『男』が現れると、当然のごとく、興味が湧くらしく、この状況である

もしかしたら、ISを動かせる男の俺たち兄弟を利用したり、はたまた邪魔に思うことがあるかもしれない
これは、俺の推測なのでなんとも言えない

だが、今の状況は、一夏でなくとも困るだろうな

その一夏がこちらに視線を向けてくる。どうやら、助けを求めているようだ

俺が一夏に話し掛けようとしたとき、声を掛けられた

「ちょっと、いいか？」

一夏と俺は声の主に視線を向ける。この声は聞き覚えがある

「箒か」

「……………」

目の前にいたのは、実に六年ぶりに会う幼馴染、しののほ箒はうきだった
一夏と俺が通っていた剣術道場の娘で、俺が会った、しののたはね箒はねノ之束の妹
髪型は相変わらずポニーテールといったもので、昔から切っていないのか、かなりのロングヘアだ

雰囲気は昔と比べて、鋭さが増していた。まるで抜き身の日本刀の

ようだ。

「えっと、廊下でいいか？」

「ああ」

「……………」

「お前も来い」

「む……………」

箒に腕を掴まれて連れ出された
何だ？俺も行かないといけなかったのか
そして、箒に連れられたまま、屋上にやって来た

「久しぶりだな、箒。六年ぶりか？」

「そうだな、一夏」

相も変わらず、無愛想な箒である

「そういえば」

「なんだ？秋五」

「去年、剣道の全国大会で優勝したらしいな。さすがじゃないか」

「そうそう、俺も新聞で見たぜ」

「な、なんで……そんなことを知っているんだ!？」

褒めたつもりだったのだが、逆に怒られてしまった。さすがに訳が分からん

「そのとき、丁度ロシアに居てな。千冬姉さんから電話で聞いた」

「ろ、ロシ……!？」

「秋五つて、たまにわかんねえな」

ほっといてくれ

「しかし、六年ぶりに会ったが……変わらないな。すぐ筈とわかったぞ」

「な、なに?」

「髪型が一緒だからな」

「よ、よくも覚えているものだな……」

「幼馴染みのことだ。忘れることは無いだろう」

「……………」

顔を赤くさせてこちらをじっと見てくる篤
む、なんだ？また怒らせたか？

キンコーンカーンコーン

いろいろ話しているうちに予鈴が鳴った

「時間だ、行くぞ二人とも」

「わ、わかっている……………」

「お、おい……………まっしてくれ、二人とも」

その後、一夏は千冬姉さんに出席簿アタックを食らっていた

二時間目は一夏の勉強不足が顕著に現れた時間だった
一夏はISの参考書を電話帳と間違えて捨ててしまったとか。おかげで千冬姉さんに思いつきりげんこつを食らっていた

仕方なく、俺の参考書を見せたが……顔がちんぷんかんぷんといった表情だった

まったく……相変わらずだな、一夏は

そして休み時間。とりあえず、俺がわかる範囲で教えているところだそこに、ひとりの女子がやってきたそれを見上げる俺たち

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「なんだ？」

またもや聞き覚えのある声に、俺は抑揚なく答える
誰かと思えば、両親を亡くしたイギリスの富豪のお嬢様

「ちょっと、聞いてますか？」

「あ、ああ……聞いているけど……？」

「まあ、何ですか？そのお返事は。わたくしに話しかけられたのですからそれ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

久しぶりに会ったが、男を見下したような口調は相変わらずだ。
確か名前は……セシリア・オルコットだったか

「それで、何か用か？オルコット」

「あら、以前に我が屋敷を見学なさった方ですわね、お久しぶりですわ。用件というのは、おそらくあなた方はISに関して『無知』でしょうか？ですから、このイギリス代表候補生である、セシリア・オルコットがわからないところがあれば、そうですね……泣いて頼めば教えて差し上げてもよろしくってよ？」

「必要ない」

「そうですね、そうですねやっぱり必要ない……必要ない!？」

「ああ。参考書もあるからな。わからないことがあれば先生に聞けば事足りる」

俺は参考書をめくりながら答えた。

そして、一夏が代表候補生について聞いてきたのでそれについて書いてある所に指を指して読むように指示する

が、この態度が彼女の癪に障ったらしく

「あなたねえ！人と話すときは目を見てお話なさい！大体、わたくしは入試で唯一教官を倒した、エリート中のエリート！ですから

」

俺は、参考書をめくる手を止めて、オルコットと向きあう

「それはすまないな。だが、教官なら俺も倒した。一夏もな」

「な……っ！？わたくしだけと聞きましたわ！」

「女子ではってことじゃねえの？」

ISを起動させた後、俺たち二人は入試受けさせられた。

教官の乗ったISとのバトルだったのだが、一夏の時も、俺の時も勝手に突っ込み、勝手に壁にぶつかって自滅した。ただそれだけなのだが、一応勝ち負けは勝ちだ

後で聞いた話では、結果はどうあれ入学は決まっていたということだ

「あ、あなた方も倒したって言うの！？」

「ああ。俺はな……。と言うか落ち着け」

「これが、落ち着いて」

キーンコーンカーンコーン

ナイスタイミング。予鈴

「くう……。また後できますわ！逃げないことね、よくって!？」

まあ、逃げる理由もないので、頷いた

「それでは授業を始める。……ああ、そういえば今度のクラス対抗戦に出る代表者を決めなければな」

クラス代表とは、委員会や生徒会の会議にも出席することになる、重要なポストだ。一年間変更は無いそうだ

「それでは、誰か、立候補者は居ないか？推薦でもかまわんぞ」

「はい！私は織斑君がいいと思います！」

「私もそれでいいと思います！」

「じゃあ、私はもう一人の織斑君を推薦しまーす」

「おお、じゃあ私ももう一人の織斑君でいいや〜」

「では、候補者は織斑一夏と織斑秋五か、他にはいないか？」

俺は特に反論はない。しても無駄だからだ

一夏のように反論しても、取り合ってはくれないのが現実だ。

最悪、げんこつをいただく羽目になる。ここは静観が吉だ

「納得いきませんわ！」

両手を机に叩きつけて反論したのは、オルコット
表情からも伺えるが、怒り心頭のような

「そのような選出は認められません、否……認めるわけにはいきません！男がクラス代表など、そのような恥辱をこのセシリア・オルコットに一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

恥辱か、この女ではそう感じるのか

どうやら、オルコットも女尊男卑の典型的なタイプのような

「大体、ただ物珍しいからと言って、クラス代表をこんな極東の猿に任せるなど……わたくしはISの技術を学びにきているのであって、こんな島国でサーカスをやりに来たものではありませんわ！」

………何？

「大体ですね……文化としても後進的な国で暮らさなければいけない自体、わたくしには耐え難い苦痛ですのに」

ダメだ、我慢の限界だ

「たかだか、古いだけの国の人間が吠えるなよ、見苦しい」

「な……っ！？あ、あ、あなたっ……！我が祖国を侮辱しましたわね！？」

誰でも自分の生まれ育った国を侮辱されては黙っていることは出来ない

それは、オルコット然り、俺然りだ

「お互い様だ。侮辱すれば侮辱される。それだけだ」

「祖国を侮辱されては、我慢なりません！決闘ですわ！」

我慢ならない？それはこちらも同じこと

「いいだろう。受けて立つ」

周りから『おおっ』とどよめきが立つ

「やるからには、全力ですわよ？もし、手を抜いて負けたら……そ
うですわね、貴方を一生ペットにしますわよ」

「構わん。俺は全力でやるだけだ」

「それで、ハンデはおいくら必要かしら？」

「……なんだと？」

「だから、ハンデは」

「いらん。お前はつけなくていいのか？」

この一言に、クラスからあきれた笑い声が聞こえた

「それ、本気で言ってるの？笑っちゃう」

「男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

「確かにIS使えるんだろっけどねえ……言い過ぎじゃない？」

みんなが本気で笑っている

どうやら、俺が負けるとしか思っていないらしい

「確かに、俺はオルコットより弱い存在かもしれない。だが、自分

の国を侮辱されて笑っていられるほど子供でもない、ただそれだけだ」

この一言にクラスが静まり返る

ただ一人、千冬は微笑を浮かべていた

「とりあえず、ハンデはお互い無しの真剣勝負だ。これでいいな、オルコット」

「ええ、かまいませんわよ」

「話は纏まったようだな、では一週間後の月曜の放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットは各自準備を行うように。では授業を始める」

こうして、俺とオルコットの試合が決まった

「……ラッキー、これであの女子は秋五が倒してくれるし、俺は代表にならなくて済むかも」

「もう一人の織斑。お前は勝ったほうとのバトルだ、ありがたく思えよ?」

「ええええええええ!!?」

スパァン！

今日も出席簿がいい音を鳴らす

第四話 託された『剣』（前書き）

え

これを見て下さった方は『後一つ、こんな武装あつたらいいんじゃない？』的なご意見を下さるとありがたいです。

勝手なお願いですが、ご協力お願いします

因みに、私の候補は、GNソード？フルセイバーです

第四話 託された『剣』

IS学園 一年一組教室

放課後

「……………」

俺、織斑秋五は今、ISの参考書を読みふけていた
クロス・グリッド・ターン
『三次元跳躍旋回』や『瞬間加速』、果ては『二連続瞬時加速』や
『リボルバー・イグニッション・ピスト』
『個別連続瞬時加速』などの機動に関する項目を中心にしていた

まあ、ISにもよるが『二連続瞬時加速』や『リボルバー・イグニッション・ピスト』
はそれこそ、国家代表や『ヴァルキリー』、『ブリュンヒルデ』ク
ラスの操縦者でないと出来ないだろう。

「よっ、秋五」

「……………一夏か」

そんな俺の様子を、トイレから帰ってきた一夏が見に来た俺の不肖の兄、織斑一夏はどうものほほんとしていた。

俺は、セシリア・オルコットとの決闘に向けて、いろいろと実践についての教本を読んでいるのに対し、一夏は、いまいち　　といふか何もしていない。俺が負ければ一夏がやらなければならないと云うのに……

「大丈夫なのか？一夏。余裕そうだが」

「それでもねえさ。ま、お前が勝ったら俺は全力を持ってお前をクラス代表に勧めるぜ？」

「戦わないのか？」

「やってみてえけど……お前も俺も、専用機ねえだろ？」

「訓練機がある」

「ああ、確かにな」

たまにと言っか、ちよくちよく抜けていると思うのは俺だけであろうか？

それでも、訓練機でオルコットに勝てるなどとは俺も思っていない

その時、教室のドアが開き、教室に残っていた生徒（俺と一夏も含む）が振り向くと、そこに居たのは千冬姉さん

「織斑兄弟、来い」

俺と一夏が呼ばれた。千冬姉さんは、学校では一夏を『織斑兄』。俺を『織斑弟』。取り敢えずそう呼ぶようにしたらしい。決まっってはいいいらしいので、勝手に変わることがあるそうだ

「お前たちの機体だが……織斑兄のISはこちらで用意することになった」

「は、はあ……」

「もう少し、喜んだらどうだ？織斑兄」

「え？あ、ど、どうも……」

どうやら、一夏のISは学園が出してくれるそうだ。おそらくは政府の援助があるのだろう
やはり、男のIS乗りというのは珍しいから、恐らくはデータ取りといったところか

「ええ！？織斑君、専用機持ちになるの！？」

「いいな、いいなあっ」

女子の言うこともわからなくはない。入学して間もなく、政府から

ISが提供されるのだ
うらやましいことこの上ないだろう

「そして、織斑弟だが……」

「……先生？」

黙ってしまう先生。その目は俺を見据えている
千冬姉さんの表情はいつになく厳しいように見えた

「お前のISは既に届いている。後で第三アリーナに來い」

「……………了解」

いくらなんでもこの時期は早すぎないか？……束姉さんは何を考え
ている？

まさか、俺たちの行動は束姉さんにチェックされているのか？でな
ければこの代表戦一週間前に届くなど有り得ないだろう……

「弟君は今日にも専用機持ち！？」

「す、す……い……！！！」

教室が一気に騒がしくなった。しかし、弟君はなあ……

「すまないが、俺は弟君ではない。織斑秋五だ。これからは秋五と呼んでくれ」

急に静まり返る教室。そして

「「「「「はーいーいー!!!!」」」」」

元気な声が返ってきた

「いいのか？秋五」

「ややこしいからな」

「来たな」

第三アリーナのピットに入ると、千冬姉さんと山田先生そして

色がグレーの『クアンタ』がいた

「な、なんだ？このIS……この前見たISと全然違うじゃねーか」

俺のISが気になったのか、一夏も付いてきたのだ

一夏が言っているのは、入試の際に動かしたISのことだろう

「このタイプは全身装甲フル・スキンといってな、文字通り、全身装甲のISだ」

「へえ……」

一夏がまじまじとクアンタを見る

確かに、一夏から見れば珍しいのだろう。山田先生も最初は驚いたらしい

クアンタを見ながら秋五は目を閉じ思いを馳せる

クアンタ……俺は悪かもしれない。あの日、生きるためとはいえ、

俺が何も考えずに盗み出さなければソレスタルビーイングもあんなことはしなかったはずだ。かといってあの日に戻れるわけじゃない。ならば、クアンタで俺がこの時代の歪みを見つけたら、それを破壊しよう。刹那・F・セイエイのように

「では、フォーマット初期化と最適化を行う、織斑弟、来い」

「了解」

俺は千冬姉さんの言葉に頷き、クアンタに近づく。それを察知してか、クアンタの頭部が外れる。それを千冬姉さんが取れば、クアンタの上部が前後に分かれて、受け入れ態勢を作る。俺はISをつけた山田先生に運ばれて、ISに搭乗した。すると、分かれていた状態が元に戻り、千冬姉さんが頭部をかぶせるように装着すると、頭部と胴体が完全に接着された。どこから見ても継ぎ目はない

しばらくすると、ディスプレイが現れて、夥しい数の数字が流れ始める

「どうだ？秋五」

「目の前を夥しい数の数字が高速で流れている。目が痛くなりそうだ」

「順調なようだな。そう言えばお前はずっとその口調だが……敬語でしゃべる気はないのか？」

「ああ、すまない。織斑先生」

「……まあいい。山田先生、彼をアリーナに」

「了解しました、織斑君、いけますか？」

「問題ない、いける」

「では、お先にアリーナに行ってますね」

そういうと、山田先生はスラスターを吹かしアリーナに飛んでいった

「織斑秋五、ダブルオークアンタ………飛翔する！」

頭部のツインアイが光り、GN粒子を放出しながら、クアンタは空に飛び立った

IS学園 第三アリーナ観客席

「え……っ？なにあれ!？」

「嘘、フル・スキン全身装甲のISなんて初めて見た!」

秋五がアリーナに飛び立つと、観客席はどよめきに包まれた
どのようなISでも、全身装甲のISは稀で滅多に見かけない
その事実が、クアンタの注目度を跳ね上げていた

「秋五……」

篤は呟くとその姿を見つめていた

いつもそばに居た秋五。無愛想だが、優しいところもある
姉のせいで別れたときは、一週間は泣いた気がする

会いたかった男が今、目の前でISを身に纏い空を飛んでいる

「ふん……カッコいいじゃないか、秋五の奴」

顔が見えないのが残念だが……今はこの姿を目に焼き付けよう。そ
う思う篤だった

「では、初期化と最適化が終わるまで、稼動試験と武装試験を行います」

「了解」

「ではまず、このアリーナを一周してみましょうか。ついてきて下さいね」

山田先生が先行し前を飛んでいく。俺はそれに習うようにつかず離れずの位置でついていく

『飛行は問題なさそうだな、山田先生』

「はい。では徐々にスピードを上げていきますね、置いて行かれないようにしてくださいね」

そういうと山田先生はグンツとスピードを上げた

よし。行くぞ、クアンタ

心の中で呟き、俺はスピードを上げる　　が、なかなか追いつけない。どうやら山田先生は加速し続けているようだ

く……っ！もつと加速を！

俺のその思考を読み取るかの如く、クアンタはスピードを上げた
が

ドンッ！……！

滑らかな加速ではなく、急加速してしまった
当然のことながら、山田先生を追い抜いてしまう

「織斑君！？」

「く……っ！」

ドゴオオオン！

俺は壁にぶつかった
その格好は、頭から壁に埋まっており、なんとも格好のつかないものだった

「織斑君、大丈夫ですか!？」

「……問題ない」

俺は壁に埋もれながらも、淡々と言った
決して、照れ隠しでは無い。……多分

「良かったです……んしょっと」

「すまない」

俺は、山田先生に引っ張り出された。正直、格好悪いことこの上ない

「いえいえ、途中までは完璧な加速でしたよ。ただ、途中で焦っちゃいましたね」

「ああ。次からは気をつけよう」

「はい。次は武装試験に移りますね」

「了解」

「では、武装を展開オープンして下さい」

俺は手を前にかざし、念じるすると、刀身全体がクリアグリーンの
一振りの剣が展開された

「……GNソード？」

IS学園 第三アリーナ管制室

「ほう、剣か……ということは近距離戦闘特化型か？」

私はキーボードを走らせる
ディスプレイにその武器の特徴が表示される

「……ソードモードにライフルモード、それにGNシールドビット
にGNソードビット ほう、ソードビットの組み合わせでバス
ターライフルやバスターソードにもなるのか。だが多用はできまい。

おそらくは中距離戦闘型か」

私は項目を武器から機体のスペックに移した

「……何？性能が五十パーセントに抑えられているだと？リミッターか……？」

あのバカ 篠ノ之東なら作るなら徹底的に完璧に仕上げてくる。スペックをわざわざリミッターなどで下げはしない

となると 東製作では無い？

ならば誰が作るのか？このような馬鹿げたISを

『山田先生、そろそろ最終試験に入ってください』

「え、は、はい！では織斑君、最終試験です、実際にIS戦闘をし

て、私を倒してください」

山田先生を倒す。それ自体は簡単だ。入試のときに一度勝っているのだ

俺は、頷き

「了解した」

後に、この俺の考えが短慮だったことを思い知る

まず、俺は軽く山田先生に斬りかかるがひらりとかわされる
そして、山田先生に蹴り飛ばされる

「ぐ……っ!？」

『シールドエネルギー、残り600。装甲破損無し』

「織斑君、ここが戦場ならやられてますよ?」

「くっ」

山田先生は五十一口径アサルトライフル『レッドバレット』を両手にマウントし、掃射してきた

俺はその掃射を避けながら、剣で弾きながら接近しようとするが、

そうすると、的確にこちらを狙ってくる。そして離れればまた掃射

「近づけない……っ！」

『シールドエネルギー、残り400。装甲破損レベルB』

「まずい……っ」

『織斑、聞こえるか』

この声は……姉さん？

『その武器は斬るしかできないのか？ん？』

「……何を……っ！？」

俺はGNソード？のスペックデータをウインドウに出す

そこにはソードモードとライフルモードの使用方法が載っていた

……だが、状況を覆せるか？

それでも無いよりはましだ。俺はGNソード？をライフルモードにし、連射する

それまで、近寄っては離れるばかりの相手がいきなり撃ってきたのだ。山田先生は巧みに避けるも一発当たってしまった

「やりますね……でもっ！」

山田先生は再び掃射を始める。俺は弾幕を避けながら一発一発を当てていく

『シールドエネルギー、残り300』

「……エネルギーの減少が減っている。何か考えているのか？だが……これはチャンスでもあるな」

織斑君は動きをとめ、その場から狙撃の要領で私を狙い始めた。どうやらダメージ覚悟のようですね

「……クス、いただきますね」

私は、左手のレッドバレットを掃射しながら、右手に五十口径対工
S狙撃ライフルを展開し、狙いを右肩に定めて狙撃。弾は吸い込ま
れるように肩に命中。

「初弾命中」

私は、勝利を確信した

『シールドエネルギー、残り200』

山田先生の放った弾は肩に命中し、アーマーを破砕した

「この程度のダメージなら・・・」

そして俺は次の瞬間、目を見開いた
狙っているのは俺の頭部

「あれはまず」

キュンッ

俺が認識した時には時既に遅く
弾が俺の額部に命中。装甲を砕くも、絶対防御によって額は貫通し
なかった

だが、その衝撃は凄まじく、俺は吹き飛んだ

「ぐああっ!!」

『シールドエネルギー、EMPTY』

俺は頭部を狙撃され、この戦いに負けた

「まったく……初期化と最適化が終わる前にやられるとはな」

「文句は無い。俺は負けたからな」

俺は、ISの初期化と最適化が終了したため、ISを解除し、ピットで千冬姉さんと山田先生、一夏と俺で話している　　が、俺はあまり口数多く話してはいなかった
最適化は特に形状が変化したわけではなく、ただ、色がグレーからトリコロールに変わったただけであった
因みに、IS待機状態はソレスタルビーイングのエンブレムがついているプレスレット

皮肉だな……このエンブレムは

ゴチン！

「っ　　！？」

「落ち込むのも大概にしろ。落ち込むときは大体お前は無口になる」

「……………すまない、織斑先生」

その言葉に、納得したように頷く千冬姉さん

その後、代表戦当日まで、俺は暇を見つけてはアリーナでISを起動させ、動かした

そして

代表戦、当日が来た

第五話 VSブルー・ティアーズ

IS学園 第三アリーナAピット

「さて、秋五、準備は良いか」

「問題ない」

あれから結局、俺たちは千冬姉さんに下の名前で呼ばれることになった。

うちの姉さんは結構、優柔不断だ

ゴスッ！

「っ
っ！」

「下らんことを考えている暇があったらさっさと準備をしろ」

べつやら、逆鱗に触れてしまったようで、千冬姉さんそのままピットを出たようだ

俺は、赤八口と遊ぶことにした

「……………」

「目をそらすなっ」

少し離れたところでは箒と一夏が何やら言い争っている

どうやら、一夏がISのことを教えてくれなかったことに文句を言っているらしい

俺は代表戦当日まで自分のことで手一杯だったので、気が回らなかったな

取り敢えず、一夏を止めようか

「一夏、もう良いだろう。いまさら言ってもしょうがない、あまり箒を責めるな」

「……………わかった。悪かったな、箒」

「大丈夫だ、一夏。ありがとう、秋五」

「気にするな」

俺は、一言言っただけで、準備に戻る。といってもISを展開して、少し調整をするだけだが

「お、織斑君織斑君織斑君っ！」

山田先生が慌ててこちらに来る。俺と模擬戦をしたときの冷静さは微塵も感じられない

同じ人間に見えないが、同じ、山田真耶先生だ

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す〜は〜、す〜は〜」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

一夏がまた冗談をやらかしている。後で姉さんに怒られるのがオチだが

「ぶはあっ！ ま、まだですかあ？」

どうやら、止めるタイミングを欠いたらしい

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パンツ！

どうやら、一夏が山田先生を眺めている間に戻ってきたようだ
その音は、軽い音だが経験上、いい音がするほど痛い

「千冬姉」

パンツ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなければ死ぬ」

俺は一夏を呆れた目で見る。もう少し学習したほうがいい
だが、千冬姉さんがこの性格では旦那はおろか、彼氏すら出来なく
なる。心配だ

「お前たちが手間をかけないような男になれば、見合いで何でも
やってやるさ」

姉さんの得意技の一つ、読心術。というか、心を読むとは……
たまに姉さんが某無敵超人の血縁者ではないかと思ってしまうこと
がある。……無いか

「そ、それですねっ！ 来ました！ 織斑君の専用IS！」

ようやく一夏のISのお披露目か

「秋五はさっさとアリーナに行け。一夏のISならアリーナで見る」

これは勝ってこいということか？

勝てるか分からないが、全力を尽くすだけだ

「了解。一夏……待ってるぞ」

「おっ！」

俺は、オレンジハ口を持ったままISを展開させ

「では、行って来る」

「秋五！」

声をかけたのは、箒と一夏だった

「俺も、すぐ行くからな！」

「秋五……必ず、勝ってこい！」

二人の言葉に俺は頷き、オルコットの待つアリーナに飛び立った

「そういえば」

「どうしました？山田先生」

「秋五君、なにかおもちゃを持ってIS展開させてましたけど？」

「……………何？」

「あら、逃げずに来ましたのね」

オルコットが見下ろしながらふふんと鼻を鳴らす。

相変わらず、腰に手を当てたポーズが様になっている。練習でもし

ているのか？

「当たり前だ。逃げる理由も意味も無い」

「先日の模擬戦……見させていただきましたわ。山田先生ごときに負けているようではお話になりませんことよ？」

「そうか。お前からは山田先生ほどのプレッシャーは感じないが？」

ピクンとオルコットの眉が反応する
面白いほどに挑発に乗ってくれるな。

「ま、まあ？誰であろうとも、この『ブルー・ティアーズ』には敗北の二文字は与えることは出来ませんわ！」

胸に手を当てて高らかに叫ぶオルコットが装着している、鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』

その外見はどこか王国騎士のような気品さを感じる

その武装は、二メートルを超える銃器、六十七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』。背中にあるフィン・アーマー四基

「今からでも遅くありませんわ。わたくしが一方的な勝利を収めるのはわかっています。ボロボロな惨めな姿を晒したくなければ、今ここで」

「御託はいい。来い、代表候補生」

俺はGNソード？を呼び出すと同時にアラームが鳴る。どうやら相手も攻撃態勢に入ったようだ

「そう、残念ですわ。それでは」

『ハロ！コウゲキクル！コウゲキクル！』

「お別れですわね！」

キュインツ！と耳を劈くような音。それと同時に走った先行が俺の体を撃ち抜く

バシユウン！

撃ち抜くかと思われた閃光は、いつの間にか俺の前に出てきていた左肩のシールドが防いでいた

「すまない、ハロ」

『キニスルナ、キニスルナ』

ハロが機転を利かせて、守ってくれた

「よし、行くぞ」

俺は、ブルー・ティアーズに向かっていく

「よく初撃を防ぎましたわね。ですがここからはそうはいきませんわ」

背中のフィン・アーマーを展開させる

「さあ、踊りなさい！わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞^{フル}曲^ツでー」

フィン・アーマー四基、そしてスターライトmk?からレーザーの驟雨が降り注ぐ

俺は、できるだけレーザーを避けながらこちらもビームを連射する

「く……っ！ソードビット展開！」

肩のシールドからソードビットが六基、射出される。そしてそれはまっすぐにオルコットに向かう

「な……っ、ビットですって!？」

オルコットはビットをすべてソードビット迎撃に向かわせるが、全て、避けられる

どうやら、ビットを操作している時は自分は攻撃できないらしい。これはチャンスだ

「はあああっ!！」

「しまっ きゃあああっ!！」

ソードビットの斬撃に加えて、俺の攻撃もヒットし、オルコットは大きく態勢を崩す

「悪いが、俺の勝ちだ!！」

体勢を崩したオルコットにソードビットを向かわせ、斬りつける
ソードビットが六基、オルコットを斬り付け、ラストに俺が斬撃を
繰り出し、オルコットに止めの一撃を与えた。そしてその攻撃は、
絶対防御を発動させ

『シールドエネルギーEMPTY。勝者、織斑秋五』

……何とか、勝ったか

ソードビットをシールドに戻し、オルコットに近づく。

その表情は苦々しく、多分に悔しさを込めたものだった

「……さぞいい気味でしょう？あれだけ大口を叩いておきながら、このザマですものね」

「確かにあれだけのことを言った割には……と思わないこともない。だが、お前はここで終わりか？終わりにしたいのか？そういうのであれば止めはしないが」

「出来ません！終わりになんて出来ませんわ！」

オルコットのその言葉に俺は少し笑みを浮かべ、一言だけ、

「それならいい」

と呟いた。

そして、その強い意志を確認した俺は背を向けビットに向かう。ビットに向かう俺にオルコットが願うように言葉を紡ぐ

「ですから、負けないでください。いつか私が勝利するまで……！」

「了解した」

俺はその言葉に短く答え、ピットに入った

「織斑……秋五」

セシリアは秋五の名前を呟きながら反対のピットに戻っていった

その後、一夏対秋五が行われたが

「ちょ……っ！ずりーぞ！それ！」

「すまない。だが、負けられないからな」

俺はソードビット、シールドビットを展開し、一方的に勝利した

「って、俺の戦闘、これだけかよ!？」

「ドンマイだ、一夏」

こうして、クラス代表戦は俺の二勝で幕を閉じた

第五話 V S フルー・ティアーズ(後書き)

えゝ感想待ってます

第六話 セシリアの想い（前書き）

第七巻見ました

黛姉妹の名前に渚と薫

渚 カヲル

なんちゃってw

第六話 セシリアの想い

IS学園 第三アリーナ Aピット

「まったく……もう少し持つと思ったがな」

「いや、あれは無理だって」

「修行が足らんな、一夏……秋五を見習え」

「筋は悪くないですから。頑張りましょう、一夏君！」

一夏はいま筈と姉さんに言葉で滅多打ちにされている。山田先生は励ましている、優しい人だ
俺はというと、赤八口と戯れている

「一夏はこれからも特訓あるのみだ」

「わかってるさ、負けっぱなしは嫌だからな」

「それでこそ、俺の兄だ」

俺は少し笑みをこぼす

「ふ……どっちが兄かわからんな、一夏」

「さすが、秋五君ですね！」

「……………」

なぜか一人黙ってしまった筈を見る。すると筈は慌てて顔を背けた。
心なしか顔が赤い

(うう……秋五め、あんな顔もするんだな。カッコよすぎるじゃないか……)

そんな筈の心は流石にわからず首を傾げる秋五

「さて、そろそろアリーナを出るぞ」

その言葉に、俺たちはそろそろとアリーナを出る

「あ、そうそう、お二人のESは待機状態になっていますが、呼び出せばすぐに展開できます。ですけどちゃんと規則もありますから、ちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

そう言われて受け取ったのは、『IS起動におけるルールブック』。
かなり分厚い
一夏がめくってみると、一枚一枚がすごく薄い。よく見るなんとか
ページの電話帳みたいだ

「何にしても、今日は帰って休め」

IS学園 一年寮 セシリアの部屋

サアアアアア……………

シャワーノズルから人肌より少し熱めのお湯が噴き出す
水滴は白い肌に弾かれ体のラインをなぞる様に流れ落ちる
セシリア・オルコットは今日の試合を振り返る

(今日の試合……………)

負けてしまった、完膚なきまでに。
それはいつも自分が相手に与えてきたもの
いつも勝利への確信と向上への欲求を持ち続けていた
そんなセシリアにとって初めての敗北を知らしめた存在

(……織斑、秋五……)

あの男子の顔を思い浮かべる
まだ知り合って二日だが、見る限り無表情で感情を出すことはない
と思っていた

だが、わたくしの発言に無表情ながら、感情を露にした

『自分の国を侮辱されて笑っていられるほど子供でもないんでな』

そう、あの時は頭に血が上っていたのでわからなかったが、最初に
侮辱したのは自分だ

自分は侮辱され返されて激昂したに過ぎない

そして、戦って……負けた

わたくしが勝ったときはいつも相手に心無い言葉を浴びせていた
わたくしが負けることはないと確信していたから。試合に勝ち、相
手を見下す。その心地よさは最高に気持ちよく甘美なものだった。
故に、わたくしが負けたときはどれだけ見下されるのかと怯えてい
た。

初めて知った敗北者の気持ち。相手はいつもこんな感じだったのだ

るうか？そして、それ以上に悔しかった。ただ純粹に、負けたことに。
わたくしならば、敗北者に心無い言葉を浴びせることだろう。でも、彼は違った

『お前はここで終わりか？』

あんなことを言われると思わなかった
誰にも媚びる事のない、強い瞳をした彼の言葉にわたくしは言った。
終わりになんて出来ない……と
その言葉に彼は一言だけ言った『わかった』と……
その言葉は、すごく慈愛に満ちた声に聞こえた

そして、彼は言った、私が勝つまで誰にも負けないと

だから、もっとわたくしは強くなる、何者に邪魔されようとも必ず
そして、勝つのだ。あの人に……織斑秋五に……！

「織斑……秋五……」

その名を呼ぶと不思議に胸が締め付けられる
胸に手を当てるドキドキと胸が早鐘を打っている
唇を撫でると、まるで触れられることを望んでいたかのような不思議な興奮を生み出す

……この気持ちは、なんだろうか？

意識するほどに胸を埋め尽くしていくこの感情の奔流は
私は知りたくなかった。その正体を、その向こうにあるものを、そし
て、秋五のことを

「……………」

浴室にはただただ、水の流れる音だけが響いていた

翌日

IS学園 一年一組教室

「え〜と、では一年一組の代表は織斑一夏君に決定しました〜」

山田先生が嬉しそうに発表する。俺も弟として鼻が高いと言っても、原因は俺なのだが。

「え〜と、先生、質問です」

「何でしょうか?」

「俺は昨日の試合に負けたんですけど　　なんで代表なんですか?」

「それはですね……二勝した織斑秋五君が辞退したからです」

「は?」

「一夏はクラス対抗戦に出てもっと技術を磨くべきだ」

「おまつ　……ぜってー面倒だとか思ったからだろーが!」

やはり気づいたか

とはいえ、一夏に強くなって欲しいというのは嘘ではないのだがな

「一夏さん、そういった偏見を持った考え方はいけませんわ」

誰かと思いい見渡すと、意外や意外、オルコットだった
相も変わらず、腰に手を当てたポーズが様になっている

「秋五さんは一夏さんにもっと強くなつてほしいが故にこの選択を
されたのですわ。そうですね？秋五さん」

「ああ、よくわかったな」

本当に、よくわかったな、オルコットも読心術者か？

「いえ、これぐらいは……いつもあなたのことを考えてますので…
…」

最後のほづが聞こえなかったが、どうやら造作もないことらしい。
すごいな

「敗者は勝者に従うべし。代表は一夏だ」

姉さんの駄目押しもあってか、一夏は渋々了承した

「いやあ、セシリアも織斑先生もわかってるねえ！」

「そうだよね！ まあ、私たちはどっちでも無問題モクマンタイなんだけどね」

この生徒の発言は聞かなかったことにしよう

休み時間

「まったく……」

「そう怒るな。クラス代表になればISの操縦に事欠かないはずだ、
いずれは俺より強くなるぞ」

「そういうもんかねえ」

「あの、秋五さん？」

呼ばれたので振り向くと、オルコットが立っていた
何時の間にやら名前で呼ばれているが、そこは気にしないタイプだ
というか、さっきも呼んでいたな。気づけ、俺。

「あ、あの……アリーナでISを稼働させるのですが、もしよければ、秋五さんもいかがですか？」

昨日とは打って変わっておしとやかなオルコットに流石に驚く俺。
一夏もぼかんとしている

「あ、あの……？」

「ああ、すまない。いいだろう、ついでにオルコットと模擬戦が出来ればありがたいが……」

「そ、そうですね！　で、では放課後の第三アリーナでお待ちしていますわ！」

「ついでに、一夏も連れて行くが、かまわないか？」

「一夏さん？　どうぞ、かまいませんわよ」

「すまないな」

「それから、わたくしのことはセシリアとお呼び下さいな、秋五さん」

「わかった、セシリア」

名前を呼ぶとすごく嬉しそうにするセシリアを眺めていると

「では、私も付き合うことにしようか」

いつの間にか、俺の背後に箒が立っていた。いつの間にか、現れる時の音が無いので、正直、怖い。

「あら、ISランクがCの箒さんがAのわたくしに何の御用でしょうか？」

「ら、ランクは関係ない！ 私は一夏の特訓に付き合うだけだ。秋五がどうしても言うから」

そもそも頼んだ覚えがないが、それを言うと箒は怒るので黙っておく

「箒はランクCか」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

結局、怒られてしまった。因みに俺はA、一夏はBだった

「座れ、馬鹿者ども」

すたすたと歩いていって、セシリア、箒の頭をバシンと叩いて行く。すると、一夏も叩かれた。何かバカなことも考えていたのだろうか？

「お前たちのランクなど、私から見ればゴミだ。殻も捨てきれないうちから優劣をつけようとするな」

確かに、姉さんなら『S』はいつてそうだ

「代表候補生でも一から学んでもらうと言っただろう。くだらん揉め事は十代女子の特権だが、今は私の管轄時間だ。自重しろ」

さすが、公私の区別がはっきりしている人だ

「では、授業を始める」

こうして、一夏がクラス代表になった

第七話 転校生1〜受付ってどこよ!〜(前書き)

PC不調で投稿が遅れますた…;

第七話 転校生1〜受付ってどじよ!〜

IS学園 グラウンド

「ではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。秋五、オルコット、一夏、試しに飛んでみせる」

「了解」

四月も下旬に入り、桜の花も舞い散った頃。俺たちはISの授業を受けていた

俺は自然体で目を閉じる

瞬間、ブレスレットが光り秋五を包み込む。光りが治まれば、そこにクアンタを纏った秋五がいた

「集中しろ、熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからんぞ」

言われているのは一夏。どうやら早く展開できないことを姉さんに咎められている様だ

それは熟練の操縦者の話であって、一夏に言っても出来るかはわからないのでは？

なんて思っていると、千冬姉さんがジロリと睨んできた。だから、心を読まないで欲しい。

一夏は右腕を突き出し、白式の待機状態のガントレットを左手で掴む

刹那、一夏が光に包まれ、白式を身に纏う
セシリアは既に展開を終えて俺の隣に立っている

「展開は済んだな。では、飛べ」

俺たちは一斉に飛び出す

かと思いきや、俺はその場にいた

「失敗した、もう一度だ」

空を見ると、既に遠くにいるセシリアと少し、のろのろと飛んでい
る一夏がウインドウに表示された

俺は、とん。と軽く飛ぶ。宙に浮き、地面を蹴る様に飛び出す

刹那、背中のGNドライブからGN粒子を放出しながら一気に最高
速に到達しその場から消え去る

「珍しいな、秋五がケアレスミスとは」

そんな、姉さんの声が聞こえたが、とりあえず聞かなかったことに
した

「一夏、先に行くぞ」

「ま、待つてくれないのか？」

「……仕方ないな」

俺は四苦八苦する一夏の横についた
どうも、まだ慣れていないようだ。

「何をやっているか、一夏。白式のスペック上の出力ではクアンタ
と互角、ブルー・ティアーズより上だぞ」

通信回線から姉さんの声が聞こえる。どうやら一夏がお叱りを受け
ているようだ

千冬姉さんはかなりのスパルタだ。例え一夏でも……いや、一夏だ
からこそ厳しくしているのだろう

「秋五もいちいち一夏に付き合うな。先に行け」

「一夏が来なければ授業にならない」

「それでもだ」

「……了解した、一夏、すまない。先に行く」

「気にすんな、すぐに追いついてやるわ」

俺はその言葉に少し笑みを浮かべ、セシリアのいる地点に飛んでいった

少しして、セシリアの隣に機体を並べる

「一夏さんは、まだ慣れてらっしゃらないようですね」

「ああ。だが、すぐに慣れるだろう、なんたって俺の兄だからな」

「ふふっ、そうですね」

そう言ったセシリアの笑みはとても気品が漂うものだった

「そういえば、お部屋の方は一夏さんと同室ではないのですかね？」

「ああ、そうだな」

俺は、その当日のことを思い出す

入学当日

IS学園 第三アリーナAピット

IS起動試験後

「あ、そうそう……お二人の寮の部屋が決まりましたよ」

「……………え？確か俺たち、一週間は自宅から通学って話だったはずじゃ？」

「そんなんですけど……まあ、事情が事情なので、部屋割りを無理矢理変更したらしいです」

「そこまでする必要があったのか？」

俺はどうも腑に落ちないので聞いてみた

「私もそう思うんですが、上からの指示ですから……逆らえないんですよ」

上と言っても、もっと上の……おそらくは政府からの指示だろう
何せ、今まで例のない『男のIS操縦者』、国も貴重な存在として
保護（という名の監視）をしたいのだ

ニユースが報道された直後は報道機関がわんさかと押し寄せた
最後の方には遺伝子工学研究所の所長がきて「是非とも身体を調べ
させてほしい」と言ってきたので、俺は無言で突っぱねた。誰がそ
んなこと了承するか
その後で、一夏が丁重に断っていたのを覚えてる

「ということ、政府特命もあって、寮に入れるのを優先したみた
いです。まあ一ヶ月もすれば個室のほうが用意できますのでそれま
では相部屋で我慢してくださいね」

「荷物が無いから一度家に帰らなければならぬが？」

「ああ、それでしたら」

「私が手配してやっておいた。ありがたく思え」

山田先生の後ろから姉さんが現れた

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があれ
ばいいだろう」

……今度、家に必要なものを取りに行くか

「じゃあ、後で部屋に行ってくださいね？夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってくださいね。各部屋にはシャワーがついてますが、大浴場もあります学年ごとに使える時間が違いますけど

」

「了解した、俺は部屋に行く。何号室だ？」

「へ？あ、ああ……えっと、1030号室です。あ、これ、鍵ですよ」

「すまない」

「ちよつと！？説明がまだですよ？」

「それだけ聞ければいい」

「その後部屋に行ったら二人部屋だった。誰も使ってなくてな、一人で使っている」

「そうですの」

「や、やっと追いついたぜ……」

話している内に一夏がやって来た
心無しか、疲労の色が見える。……気のせいだと思いたい

「遅かったな」

「すまねえ……しかし、飛ぶ感覚がまだあやふやなんだよなあ……
なんで浮いてるんだこれ？」

「説明してもかまいませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動破
干渉の話になりますもの」

「いや……やめとこうかな」

「セシリアは理解できているのか。……やるな」

「そ、そうですか？この程度のこと、造作ありませんわ」

なぜか照れながら身体をくねらせて答えるセシリア。なんなんだ？

「秋五！何をやっているか！さっさと降りて来い！」

何事かと下を見れば、インカム片手に不機嫌な筈とその後ろでインカムを取られておたおたしている山田先生が見えた

「うるさい小娘だな……。では一夏、秋五、オルコット、急降下と完全停止をやってみせる。目標は十センチだ」

「では……お先に失礼しますわね」

そう言ってセシリアは急降下を始める。手馴れた様子で急降下からの完全停止をやってのける。

「九センチか。さすがだなオルコット」

「当然ですわ」

「では、次は俺が行く」

俺は地表に向かって急降下を開始する。言うのもなんだが、結構怖

いものだ

限界点突破のアラームが鳴った所で俺は身体を上下で入れ替え、スラスターを噴かせ完全停止した

「十一センチか、まだまだだな。秋五」

「早すぎたか……。次は上手くやってみせる」

「最後は俺か……。いくぜ！」

一夏はそう言つと、急降下を開始した。そのスピードはセシリア以上だ。だが、そのまま限界点を突破していき……

つて一夏、それでは

ドゴオオオン！！！！

俺が心で思うより早く、一夏は墜落してしまった

「馬鹿者。誰がグラウンドに穴を開けるといった」

さすがの姉さんも呆れてしまっている様だ

「あたた……。失敗しちゃったぜ」

「大丈夫か？一夏」

「秋五、そんなバカのこととは放っておけ」

箒のその言葉に俺は少しため息をつく

箒は一夏に対して時に厳しすぎるくらいがあるようだ

「厳しくするのもわかるが、こついつときは労わらないとな」

「む……。そうか、すまなかった」

何事も優しさを欠いてはいけない

「クス、優しくない女性は嫌われましてよ？篠ノ之さん」

ここでセシリアが割って入ってきた。……。何故に？

「ふん、優しいだけでは人は成長しない」

「いやですわ……。まるで鬼の面を被った人ですわね」

「猫かぶりよりはましだと思っがな」

待て、鬼の面を被った人は、例えるならば千冬姉さんだと思っが……

そんなことを考えていると……どういっことが、セシリアvs篝が始
まった

そしてそれは

バシン！バシン！

姉さんの出席簿アタックで即終了となった

「騒がしいわ、小娘どもが。やるなら授業の後にしろ」

それもまずいと思っ

じすっ……！

「い……っ……？」

「鬼の面を被ってて悪かったな」

せめて、一言言ってからげんこつを受けたかった

そんな俺の眩きを尻目に授業は進み、授業が終わった後俺と一夏はグラウンドの整備をして帰路についた

夜

IS学園 正面ゲート

「ふうん……ここがそうなんだ」

私は今、IS学園の正面ゲート前に立っていた

「えっと、受付ってどこだったっけ」

上着のポケットから一枚の紙切れを取り出す。うわ、くしゃくしゃだ……ま、いつか

「本校舎一階総合事務受付　　って、だからそれはどこにあんのよ……」

学園の見取り図ぐらい用意しておきなさいよねまったく……
ぼやきながらうつろつろと、辺りを歩いていると……

「だから……でだな」

なにやらアリーナらしき所から声が聞こえてきた
ちようどいいわ、受付の場所教えてもらおうかしら

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

あ、この声……

昔よく、私のうちにご飯を食べに来てた男子を思い出す
知り合いがいるならちようどいい、話しやすいものである
だが、その足は次の声の主で止まる

「確かに、その表現ではわかるものが少ないな」

ドキン！

え！？あ、あいつもいるの？や、やだ……………どうしよう

思い出すのはさっきの男子の弟の無愛想な子

よくからかわれている所を助けてもらった覚えがある

そして……………突然いなくなつたあいつ

久しぶりに会う想い人に嬉しくなつた私は声をかけようと歩き出す

「しゅう」

「秋五……………ダメなのか？」

「いや、そういうわけではないが」

「秋五、こういうときはビシツと行ってやれよ。説明が独特すぎるんだってな。……………なんだよ『くいつて感じ』ってのは」

「……………くいつて感じた」

「箒、言いくいが変えたほうが　　って待て、箒、逃げるな」

え？何、あの女

秋五のこと名前で呼んでた？

てか、秋五も名前で呼んでたよね？

さっきまでの嬉しさが一変、ひどく冷たい感情になっていく
そのあと、近くを通りがかった生徒に受付の場所を聞いたら三人が
出てきたアリーナのすぐ後ろと聞いたのでそこに行った

「え……はい、それじゃあ手続きは以上です。IS学園へようこ
そ、ファン・リンイン 鳳 鈴音さん」

笑みを浮かべる事務員さんに対して、私はぶすっとしていた
当然だ、想い人が他の女と仲良くしているところを見たのだ。無表
情でいられるわけがない

「あの、織斑秋五って何組ですか？」

「ああ、噂の子？1組よ。鳳さんは2組だから、お隣ね。あ、そう
そう、あの子1組のクラス代表を弟の織斑一夏君に譲ったたんです
って。でも代表戦では勝ったって言うし、やっぱり織斑先生の弟さ
んなだけはあるわねえ」

「2組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって」

笑顔で言っても、その笑顔には……ぱっちり血管マークがついていた

第八話 転校生2人宣戦布告に来たってわけ

「というわけで！ 織斑一夏君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

ぱんっ！ぱんぱーんっ！
と、クラッカーが乱射される

俺は隣の一夏を見る。その表情は幾分と暗いものだった。素直に喜べないのだろうか？

今は夕食後の自由時間。女子たちは自ら飲み物を持ってきては騒いでいる

この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は一組全員が参加していたのだが、なぜかそれ以上の人数がいる

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるよね」

「ほんとほんと」

「ラッキーだね、同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

先ほどから相槌を打ち女子を俺は一組では見た事はない。おそらく

二組の女子だろう。なぜここにいるのかは不明だ

「はい、新聞部です。話題の新生、織斑兄弟を取材しに来ました」

新聞部の取材に盛り上がる女子一同

「私は二年のまゆずみかおるこ 薫子。新聞部の副部長やっています。よろしくね。あ、後……はい名刺」

名刺を受け取る。この年で名刺とは、編集者とかを目指しているのだろうか？

「ではではずばり！ 織斑一夏君、クラス代表になった感想を聞かせてくれるかな？」

「えーっと……まあ、がんばります」

至って普通だった。その答えに新聞部副部長の薫先輩は些か不満そうに

「えー……もっといいコメント頂戴よ。俺に触るとヤケドするぜ！ とか」

「自分、不器用ですから」

「うわぁ、前時代的」

確かに、一夏の台詞は時代がかっている事がママある

「まぁ、適当に捏造しておくからいいとして」

いや、よくないだろう

「じゃ、次は織斑秋五君！ これからの抱負なんかを聞かせてくれるかな？」

できるだけ捏造されないコメントか……

「では俺は……学園最強を目指そうか」

「おお、じゃ、これも捏造して……」

何！？これでもいじられるのか？

「ああ、セシリアちゃんもコメント頂戴」

「わたくし、こういうコメントはあまり好きではありませんが……
仕方ありませんわね」

そういうセシリアは俺の隣で待機していた。好きじゃない割にはまんざらでもなさそうだが、服装は同じだが、髪の設定は心なしが気合が入っているように見えた

「んんっ、ではまず、わたくしと秋五さんの出会いからお話しせねばなりませんわね。それは」

「ああ、いいや……長くなりそうだから写真だけでいいや」

「な！？最後まで聞きなさいな！」

「いいよ、適当に捏造しとくから。そうだなあ……じゃ、秋五君に惚れたってことにしよう」

「なっ、ななっ……………！？」

途端に真っ赤になるセシリア。どうやら惚れたという言葉に反応してしまっただようだな

「そういう捏造はあまりオススメしないな。セシリアにも失礼だ、

撤回を要求する」

「え〜……しょうがないなあ」

「わ、わたくしは……別にかまいませんのに……」

その声はそれはもう小さく、俺は聞き取れなかった、何を言ったのだろうか？

「まあ、その件は置いて……写真、撮るからね、まずは織斑兄弟のツーショットね」

俺と一夏はその場で並んで、写真を撮ってもらった。そのあと、セシリアと一夏が写真を撮り

「じゃ、最後にセシリアちゃんと秋五くんのツーショット、いただきますよっ！」

どこのぞの某漫画の決め台詞っぽいことを言いながらカメラを構える
黛先輩

「あの、撮った写真は当然いただけますよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら、今すぐ着替えて」

「時間かかるからダメ。はいはい、さっさと並ぶ」

そう言っつて黛先輩は俺とセシリアの手を引いて、そのまま握手させる

「ほらほら〜もっと寄っつて〜」

十分な距離なのだが、さらに密着を要求する黛先輩。新聞の写真でそれは必要なのか？

「し、仕方ありませんわね」

そう言いながらセシリアは俺の腕に自分の腕を絡めてくる

「まで、ここまで近寄る必要は……」

「いいないいね〜、じゃ、撮るよー……1+1=は？」

「2だ」

「ぶー。田んぼの田でしたー」

「なっ!？」

パシャッ

と、気がつけば、一年一組女子が全員、俺とセシリアの周りに集まっていた。勿論、箒もだ。恐るべき行動力である

「あ、あなたたちねえ！」

「まあまあ」

「セシリアだけいい思いしよっつてのはねえ？」

「同じクラスの仲間じゃん」

「そうそう、クラスのいい思い出になるし」

「ねえ〜」

どうやら、セシリアを丸め込もうとしている

「ぐっ……っ……っ……」

苦虫を潰したような表情のセシリアを、クラスの女子はニヤニヤと

眺めている。なんなんだ？

ともあれ、取材を終えた黛先輩は帰り、俺は少し楽しんでから部屋に帰った

「ねえ、聞いた？転校生の話！」

「何だ？それは」

登校一番に話しかけてきたのは隣のクラスメイト。一夏もそれを聞いている

「中国からの転校生だってさ！この時期に転校生って珍しいよね」

「あ、そうそう……その転校生、代表候補生だったさ」

「へえ、代表候補生か」

代表候補生といえばセシリアだ

「あら、わたくしの存在を今更危ぶんでの転入かしら？」

今日も腰に手を当てたポーズがよく似合っている。イギリス人はこれが似合う人種なのだろうか？

「別にこのクラスに転入してくるわけではないのだろうか？ 騒ぐこと
のほどでもあるまいに」

先ほど、自分の席に行った篤がいつの間にかいた。俊敏だ

「どんなやつなんだろうな」

「気になるか？一夏」

「そりゃなあ、秋五は？」

「それなりにはな」

その瞬間に、篤とセシリアが微妙に反応したことに俺は気づかなかった

「秋五、今のお前には女子を気にしているような余裕があるのか？
来週はクラス対抗戦だぞ」

「いや、俺は代表ではないが？」

「何を言っていますの？ 代表戦の後、一夏さんとほか多数の意見
によって秋五さんを含めた三人のクラス対抗戦参加が決まったので
すわ」

「なんだと？」

実はあの後、実力のある生徒がクラス対抗戦に出ないのは些かおか
しいと言った教師の意見がぼつぼつと出始め、タイミングよく一夏
たちが嘆願に来たのもあり（何時行っただ？）、一組の秋五、二
組、四組の女子がクラス対抗戦に出ることになったのだ

「秋五、頑張れよ！」

俺はこのとき、初めて一夏に殺意を抱いたことは内緒にしておこう

「でも、まあ秋五君が出るなら優勝間違いなしだね！」

「そうだよ！ セシリアに圧勝してたもんね〜」

「とはいえ、油断は禁物だ。IS操縦の経験が圧倒的に少ないからな、俺は」

そう、代表候補生となると量産型でも油断できない存在だ

「さすが秋五だな、よし！ 対抗戦まで私と……………」

「でしたら、わたくしと対抗戦まで実戦的な模擬戦でトレーニングいたしましょう！ ええ、それがいいですわ！」

邪魔をされた筈はセシリアを睨み付ける。そのセシリアはしたり顔で筈を見る

この二人、妙に仲が悪い。困ったものだ

「まったく、放課後に一緒に付き合ってやるから喧嘩はするな」

「それは意味がない（のですわ）！ ……」

八モられて怒られてしまった

「まあまあ……どっちにしても秋五君には優勝してもらわないとね！」

「秋五君が勝つとクラスみんなが幸せだよ」

「秋五くん、頑張つてね！」

「フリーパスのためにもね！」

この対抗戦、優勝したクラスには食堂のデザートフリーパス（一年間）がもらえるらしい

「今のところ専用機を持つてるクラスは一組と四組だけだから、余裕余裕！」

余裕ではないんだがな

「その情報、古いよ」

教室の入り口から聞き覚えのある声が聞こえた。この声は……

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……か？」

「そつよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に來たつてわけ」

一組に波乱の嵐が吹いた……気がした

第九話 転校生くく待ってたわよーく (前書き)

いろいろとあったので・・・更新が遅れました；；；

また、明日から更新していきますのでよろしくです

第九話 転校生くっ待ってたわよー！

朝

IS学園 一年一組教室

「何、格好つけてんだ？ すごい似合わないぞ」

一夏の開口一番のこの言い草に鈴が噛み付いた

「なっ！？ あ、あんたねえ、なんてこと言うのよ！」

鈴の口調がいつも通りになった。まあ、言うのは憚れるが、俺もいつもの鈴がいいと思う

「秋五もなにか言ってるやいなさいよ！」

「ん？俺はいつもの鈴がいいと思うが？」

「え？ そ、そうかな……………そっか」

いきなりうつむいてぶつぶつ言い始める鈴。どうしたのだろうか？

「おい」

「……………」

「おい！」

「なによ！？」

バシーン！！！！

聞き返した鈴にそれはそれは強烈な出席簿アタックが入った。どうやら姉さんの登場である

「通行の邪魔だ、どけ、そして年上には敬語を使え馬鹿者」

「ち、千冬さん……………」

「織斑先生と呼べ。そしてさっさと教室にもどれ、入り口を塞ぐな、邪魔だ」

「す、すみません……………」

姉さんにビビリながらドアからどく鈴。
相変わらず、姉さんが苦手らしい

「また後で来るかね、逃げないでよ！一夏、秋五！」

いや、逃げるも何もないんだが

「さっさといけ！」

「は、はい！」

猛ダツシュで教室に帰る鈴。おそらく転入の挨拶に来たのだろう

「まさか、鈴がIS操縦者でしかも代表候補生になっていたとはな

「ああ、驚きだぜ」

あのお転婆な鈴がIS操縦者か。……………規則とか守れているのだからか？

「秋五、今のは誰だ？えらく親しそうだったが？」

「秋五さん！？ あの方とはいったいどういづこ関係で……………」！

箒とセシリアほか三名ほどに問い詰められる俺。が、悪いが無視する。後ろに鬼教官が立っているのだから。

バシンバシンバシンバシンバシン！！！！！！

五連続の出席簿アタックが箒とセシリア他三名の炸裂する

「席につけ馬鹿者が」

馬鹿だな、まったく

こうして、授業が始まったのだが…………

なぜか箒は8回、セシリアは9回織斑、山田両先生から

注意or出席簿アタックを食らっていた、そしてその度に俺を見る

…………何故だ？

昼

IS学園 廊下

「お前のせいだぞ！秋五！」

「あなたのせいですわ！秋五さん！」

「俺は知らん」

昼休み、開口一番に二人の文句をぶつけられてしまった俺
何のことかわからないので知らんと答える

というか、姉さんの前でぼーっとするのはあまりにも危険すぎる。
戦場では命とりだ

筈とセシリアもそれぐらい十二分にわかっているだろうに……

「とりあえず、俺は一夏と昼飯に行く。お前たちも来るか？」

「むう……………秋五がそういうなら私も行くつか」

「そ、そうですね。行って差し上げてもよくってよ?。」

セシリア……………行きたいならはつきりと言えはいいのだが

勿論そんなことを言えば、烈火のごとく怒り出しどこかに行ってしまうであろう

せっかくの昼飯をそんなことで不味くしたくはないのでさっさと学食に向かう

最近気づいたが……………俺と一夏が学食に行くとみんなが付いてくるので、大人数での移動になってしまう

まるでゴルフの大移動だな

と、くだらないことを考えていると学食に着き、そこに居たのは

「待ってたわよ!秋五、一夏!。」

目の前に鈴が立っていた

「邪魔だ。通行の邪魔になるぞ?。」

「う、うるさいわね!わかってるわよ」

そう言って、横にずれる鈴。……………ん?行かないのか?

「ラーメンが伸びるぞ?」

「わ、わかってるわよ!大体アンタが早く来ないからでしょーが!

「秋五はエスパーなのか?」

「まさか」

そんなやり取りをしながら、食券を食堂のおばさんに渡す

「元気にしていたか?」

「ま、まあね。あんたらも元気そうで何よりだわ」

「そうか」

一言言つて、俺は食事を持って空いてる大きなテーブルに腰掛ける
今日のメニューはボンゴレピアンコだ。某マフィア漫画の主人公も
食べていたのだろうか?……食べてないな
そして、次々に一夏たちがやってくる。因みに俺を挟んで箒とセシ
リア、対面に鈴、右斜め前が一夏だ

「でもさー、鈴いつ帰ってきたんだ?親父さんは元気か?いつ代表
候補生になつたんだよ?」

「あゝ、質問ばっかしないでよ、一夏。それにしてもあんたらがI
S操縦者なんてねえ……………ニユースで見たときはびっくりしたわよ
?」

「どうやら、一夏も鈴も久しぶりに会ったことで話したい事は山ほど
あるらしい

まあ……………元氣そうだなによりだが

「秋五、そろそろ転校生との関係を教えてもらいたいのだが?」

「そうですね!……………ま、まさか、こちらの方とつ、付き合ってたっ
しやるのか!?」

「箒とセシリアの言葉に頷くようにクラスメイトも詰め寄る
付き合っているの言葉に鈴が真っ赤になるが、一夏の「まさか!」
の一言で途端に不機嫌になる

「鈴は俺たちの幼馴染みだよ、な?」

「え?ああ、まあね」

俺が言う前に一夏が答えた。この事によってさらに場は紛糾する

「何！？お、幼馴染みは私だろう！？」

「ああ、箒が引越したのは小四の終わりだろ？ 鈴がやってきたのは小五の頭で、中二の終わりに国に帰ったから……………会ったのは一年とちょっとぶりだな」

箒と鈴は面識がないのだ。幼馴染みといわれても箒はわからないだろうな

「つまり、箒がファースト幼馴染みで、鈴がセカンド幼馴染みってとこだな」

「そ、そうか……………ファーストか……………」

嬉しそうに笑みを浮かべる箒。そして、面白くなさそうにしている鈴。

一夏、災い呼び込むな

「……………まあいいわ、とりあえずよろしく……………篠ノ之さん？」

「こちらこそ……………鳳さん」

さん付けなのに、辺りの空気が一 下がった気がするが……………気のせいかな

「んんっ。……わたくしのことを忘れてもらっては困りますわね……。中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳 鈴音さん？」

「……………アンタ誰？」

「な……………っ！？ わたくしを知らないと！？ イギリス代表候補生のセシリア・オルコットを！？」

「きょーみないもーん」

「ななななっ……………!？」

怒りで、顔を赤くしてしまうセシリア
あまり興奮すると、立ちくらみを起こすぞ？

「わたくしは、あなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったら私勝つよ？ 悪いけど強いもん」

まったく、こいつらは……………

「鈴」

「な、なに？秋五」

「あの約束、忘れてないよな？」

「なんのこと　　あつ……！」

約束と言うのは、昔、あまりにもお転婆だった鈴に『初対面の人間には失礼のないようにする事』を約束させた
どうやら、忘れていたようだな

「お前が強かろうが弱かろうが、初対面の人間には必ず自己紹介と
いったらろうが」

「い、ごめん……なさい」

これだけ言えば、わかってくれるだろう

「なら、さっさと済ませて飯を食え。そろそろ時間がないぞ？」

「……中国代表候補生、凰　鈴音……よろしく」

「あ……イギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ。よろ
しく願いますわね」

予想外のことには驚いていたみんなが急いでご飯を食べ始める。予鈴
まであと七分

「先にいくぞ」

俺は席を立ち、教室に移動する

その後、教室では一夏が恒例の出席簿アタックを食らっていた

放課後

IS学園 第三ISアリーナ

「……で、どうしてこの事ですか？」

「俺が知るか」

恒例のセシリアとの訓練のために第三アリーナに向かった俺たちが
見たものは、
IS『うちがね打鉄』を纏う筈だった

「待っていたぞ、秋五」

「篠ノ之さん？ どうしてここにいらっしやるのですか？」

「そろそろ、秋五の格闘訓練が少なくなっているだろうと思ってな」

そういえば、最近は射撃とビットの操作練習ばかりだったな
おかげで、ハロがなくても四つまでは動かせるようになった
だが、その間はソードビットが動かせない。やはりハロに一任する
か？

「ま、まさか……こんなにも早く、あっさりと機体の使用許可が下
りるだなんて……っ！」

別に悔しがるどころではないと思うが？
筈も、どこかしら……してやったりとした表情だ
女子の考えはよくわからん

「んんっ………ではいくぞ、秋五！」

「お待ちなさい！」

始めようとした箒の動きを止める声、それはセシリアだった

「訓練ならば、一夏さんに行えばよろしいでしょう!？」

「一夏はまだその域ではない」

悔しそうに言う箒だが、内心は秋五と訓練がしたいのである。

一夏は、箒の課した訓練をもくもくとやっている

「関係ありませんわ!………かくなる上は!………インターセプター
!」

『インターセプター』を呼び出す、セシリア

セシリアは格闘武器はこうして名前を呼ばないと呼び出せないのだ

「ほう、面白い。接近戦を選ぶとはな、その意気や良し!」

刀を構え、突撃する箒

袈裟気味に刀を振り下ろす。それをセシリアはインターセプターで
いなし、

その勢いで距離をとり、『スターライトmk?』を撃つ!

俺はどうすればいいんだ?

「秋五!」

「秋五さん!」

「なんだ?」

「なんだ?ではありませんわ!何を黙ってみているのですか!」

「どちらかに味方すれば、怒るだろう?」

「「当然(ですわ)!」」

「ならば……二人とも撃墜するのみ!」

この後、箒とセシリアと俺のバトルロイヤルは一夏を巻き込んで

俺の勝ちで終わった

夜

IS学園 一年寮 秋五の部屋

「お帰り、秋五」

バタン！

俺は疲れているのか？

ガチャ

「おかえり〜、あ・な・た」

ボタン！

俺は疲れているらしい……………一夏の部屋に行こうか
ため息をつく、俺の部屋の扉が開き

「ちょっと！いい加減に入りなさいよ！」

何故か、俺の新妻役になりきっている鈴が出てきた
俺は、まだ人生の墓場に行った覚えがない

「何をやっているんだ？鈴」

「え〜……………花嫁修業？」

「飯事なら付き合う気はない」

「ちょ、ちょっと！わかったから、話を聞きなさい！」

「……………」

俺は足を止めて鈴の話しとやらを聴くことにした

「秋五、いま一人暮らしだよね？」

「ああ」

「一夏と篠ノ之さんも一緒に居るんだからさ、幼馴染みとして、住んであげてもいいわよ？」

「俺は別に」

ズドドドドド……………！！！！

何かの音がすると思えば

それは筭だった

「き、貴様！何をしているか！」

「え？秋五の部屋に住まわせてもらおうかと思って」

「なっ！？馬鹿者！！！だ、男女七歳にして同衾せずだ！」

「あんたは一夏と住んでるじゃない」

「ぐっ……………あ、あれは、一夏が困っていると言っから……………っ！」

なぜか、俺を見て自分を弁護する筈。そんなことはわかっているぞ？

「そうそう、秋五、もう一つの約束、覚えてる？」

「は、話を聞け！」

どうやら、鈴にはもう筈は見えていない

「大きくなったら毎日酢豚を食わせてくれると言っ奴か？」

「そう。覚えててくれたんだね？」

「記憶力はいいほうだからな」

「で……返事、聞かせてくれる？」

「無理だ」

「……………へ？」

「無理だと言っただ」

鈴はぼかんとして、筈はじつとこちらを見ている

「な、なんでよ！？」

「お前は俺より弱い……それだけだ」

鈴は肩を震わせながら俯いている。

それもそつだ。秋五は鈴と戦ったことがないのだ

それでも鈴は自分より弱いと言いつつ放ったのだ

「そつ……私があんたより強いつて証明できればいいのね？」

「そつだな」

「いいわ、じゃ今度のクラス対抗戦で証明してやるつじやない！」

「いいだろう」

鈴は身を翻して部屋を出て行った

「秋五」

「なんだ？ 籌」

「不器用だな、お前は」

「お前ほどではないがな」

「フツ……勝てよ、クラス対抗戦」

「端から負けるつもりは毛頭ない」

そして

クラス対抗戦の日がやってきた

第十話 クラス対抗戦・一回戦

クラス対抗戦当日

IS学園 第三アリーナ

第一試合直前

「秋五、お前の対戦相手って……誰？」

「二組の女子だな」

「もしかして、鈴にクラスの代表を譲った……？」

「そのようだな」

その女子一（名前は知らない）も好きで譲ったわけではなさそうだが……

「ま、何にしてもがんばれよ！そんで、決勝でやりあおうぜ！」

「ああ」

笑みを浮かべては、アリーナのフィールドに向かう

「やっと来たわね……まったく、何でわざわざ男なんかと……」

これは……どうやら苦手なタイプの女子のようだ

「私はあなたなんかにつき合ってる暇はないの。私はあの凰 鈴音を倒すんだから！」

「そうか。しかし悪いが、その願いは叶えられそうにない」

「男のくせに……生意気よね」

仲良くする前のセシリアみたいだな。まあ、なんにしても、戦闘開始だ

同時刻

第三アリーナ 観客席

「まったく、何なんですの！？ あの女は！」

「まるで昔のお前だな」

「し、篠ノ之さん！？なんて事を言うのですか！？」

「事実だろうか？」

「わたくしはあそこまでひねくれていませんわ！」

いや、前のオルコットそっくりだが……

私はオルコットと共に第三アリーナにいる

一夏は別のアリーナで戦っている。確か、五組の代表が相手だろう

……今の一夏なら大丈夫だろう……多分

「秋五の相手は……量産型だが、まがりなりにもクラス代表になった者だからな。油断は出来まい」

「そうですね」

頷きながら同意するオルコットを一瞥して、視線を秋五に戻す

「負けるなよ」

『それでは、試合開始』

『それでは、試合開始』

合図と同時に俺と対戦相手は上空に舞い上がる

対戦相手の女子は早速、銃を構えてこちらに発砲してくる

「さすが、腕はかなりいいな」

余裕を持って回避したはずだが、ギリギリで回避することになり
シールドエネルギーが少し減った

『シールドエネルギー残り770、装甲ダメージ無し』

俺はソードビットA、Bを二基ずつ射出。それを連結し二本の長剣
にし、対戦相手に向かう

「典型的な接近戦特化タイプなのね・・・笑っちゃわ」

「いくぞ」

俺は対戦相手の女子に急接近する

「っ……離れなさい！」

女子は銃を乱射し、弾幕を張る

俺はそれを器用に回避しながら接近する

「なんで……当たらないのよ！」

女子は近接ブレードを展開し、斬りかかる

俺はそれを回避。剣を首元に当てて

「そんなに激昂しては……当たるものも当たらないぞ」

俺は剣をクロスさせるように斬り付ける

「きゃあああっ!!!!」

『シールドエネルギー EMPTY、勝者、織斑秋五』

「余裕の勝利だな、秋五」

「そうでもない。冷静にこられていたら危なかった」

あの女子はかなり激情家のようだ

ピットに帰る際にこちらをにらんでいたのを思い出す
いつか、リベンジにくるかもしれないな

「まあ、私に勝ったのですから……これぐらいは当然ですわね」

セシリアも相変わらずだな

そうしている間に、一回戦の結果が表示された

「次は、四組のクラス代表か」

「一夏は……鳳か」

「先に一夏の試合か」

「そうですね。ピットに向かいますか？」

「席を取っておいてくれ。一夏に会ってくる」

「了解した」

「一夏には無理をしないように言うっておかないとな」

第二アリーナ Aピット

「一夏」

「秋五か」

俺はISを纏う一夏を見つけた
見た限りでは気負っている様子もない。これなら勝つ可能性も無くはないな

「鈴はかなり気合を入れてくるはずだ。無理はするなよ」

「わかった、いつもサンキューな」

「気にするな、兄弟だろう？………行ってこい」

「ああ！」

そして、一夏vs鈴が始まった

第十話 クラス対抗戦・一回戦（後書き）

次回、乱入者が！・・・しかも一体じゃないかも！？

第十一話 2つの乱入者（前書き）

えゝ・・・キーボードの不調で投稿が遅くなりました；；；

とりあえず、その場しのぎでキーボードを買ってきましたw

第十一話 2つの乱入者

昼

IS学園 第二アリーナ 観覧席

「そろそろ、一夏の試合か」

俺は食堂で昼飯を取って、観覧席にいた
両隣にセシリアと篤がいる

「秋五、一夏は勝てるか？」

「わからん、相手は鈴・・・代表候補生に第三世代型ISだ、なにか特殊装備があると見ていいだろう」

「そうですね。かなり不利と見て間違いないでしょうね」

そう・・・代表候補生と第三世代型ISと云っただけで不利だと言っ
のに

一夏のISは近距離特化型IS・・・つまり、射撃武器がなく、刀

一本だけなのだ
ただ、一夏のISには『ワンオフ・アビリティー単一仕様能力』がある

ワンオフ・アビリティーは『セカンド・シフト二次移行』を行う際に発現すると言われる能力で

セカンド・シフトしても、発現する確立は極めて少ない
そのワンオフ・アビリティーを一夏のISは『ファースト・シフト一次移行』の時点で持っている

ちなみに、一夏のワンオフ・アビリティーは『ゼロカクハク零落白夜』と言っらしい

一夏が零落白夜を使いこなせれば、あるいは……

零落白夜の能力は対象のエネルギーの対消滅

それを使いこなせれば、一夏にも勝機はあるかもしれない

『それでは、織斑一夏対凰 鈴音 試合開始』

試合開始と同時に二人が動いた

一夏が雪片式型を展開し、鈴に斬りかかる

鈴がそれを青龍刀で受け止める、一夏の雪片式型を弾き、もう一つの青龍刀と柄をドッキングさせる

「二刀一対か……厄介だな」

「うむ、一夏……どうする?」

それをバトンの様に回転させながら一夏に斬りかかる
遠心力でスピードと威力が上がっているために捌くので精一杯な一夏は一次後退する

そのとき、鈴が口元に笑みを浮かべる

肩の非固定浮遊部位アンロック・ユニットのアーマーが開く。中心が光った瞬間、一夏は何か「殴り」飛ばされていた
一夏は何があったのかわからない表情をしている

「何だ？超高速の・・・弾？」

「あれは、衝撃砲ですわね」

「「衝撃砲？」」

俺と箒は鸚鵡返しのように聞き返していた

「空間自体に圧力をかけて砲身を生成余剰、それで生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す・・・ブルーティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

「なるほど、砲身が見えないのは不利だな」

「うむ、私でも回避できるか・・・」

「どうやら、あの衝撃砲は射撃角度も無制限のようですね・・・」

厄介ですわ」

だが、一夏はなんとか回避している。が、それだけだ
回避に精一杯で攻撃に転じていない
いや、これだけ回避できるのも白式のスペックがあればこそか・・・

「ああ、もう・・・じれったいですわね・・・！」

「仕方なかるう・・・ああも見えなくてはな」

「ああ・・・だが、一夏はまだ諦めてはいない・・・！！・・・仕掛けるぞ」

一夏が加速の体勢に入った・・・何をやる気だ？
一夏が仕掛けようとしたその瞬間

ドゴオオオオンッ！

「な、なんですか！？」

「凰か！？」

「いや、衝撃砲ではないみたいだ」

鈴と一夏の間から砂煙が立ち込める

「嫌な予感がするな。セシリアと篝はとりあえず姉さんのところに行ってくれ。俺は一夏のところに行く」

「でしたら、篝さんのみでもよろしいのでは？」

「いや、何かのときのために直ぐに状況把握ができる管制室にいてくれ」

「……………了解しましたわ。……………御武運を」

管制室に向かう二人を見送って、俺はピットに向かう

「くそ、何故開かないんだ!？」

珍しく、俺はあせっていた。ピットには入れたのだが、アリーナに続く扉がどうしても開かない。

何故だかはわからないが、先程よりも嫌な予感がする……これだけで済まないような……『何か』

「………仕方が無い、来い、ダブルオークアンタ!」

刹那、俺の身体が装甲に包まれる

ダブルオークアンタに包まれた俺は、GNソード?にソードビットを装着する

「バスターライフルモード。GN粒子、チャージ完了……狙い打つ!」

先端が開き、間にエネルギーが溜まっていく

そして、俺の声に呼応するかのごとく、エネルギーの奔流が扉を消し飛ばす

そこで見たものは、謎のISに襲われている一夏と鈴だった

第三アリーナ バトルフィールド

「お前・・・何者だよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏と鈴は謎の全身装甲フル・スキンのISと対峙していた
その風貌は、腕が以上に長い、首という首が無く、頭と胴体がくっ
ついている感じだ

『二人とも聞こえますか！？いまそちらに先生方が向かっています
ので、すぐに退避してください！』

その声は山田先生だった。心なしか、その口調は厳しいものだった

「いえ、俺たちはここで敵を食い止めます！」

この時、謎のISによって遮断シールドのレベルが4に設定され、扉のロックが全て掛けられていた
三年生の精鋭がシステムクラックを行っていたが、いつになるかわからない

一夏はこの事実を知らなかったが、あのISは遮断シールドを破ってきたことは一夏にも分かった
ここで逃げれば、観客席に攻撃しかねない。・・・一夏はそう判断した

「いいな？鈴」

「だーれに言ってるのよ！こっちは準備万端整ってるわよ！其れに、逃げようにもピットの扉全部ロックされちゃってるみたいだし？それならここで戦うわよ」

「なら、OKだな」

『だ、ダメですよ！生徒さんにもしもの事があったら・・・』

そこまでしか言葉は聴けなかった

敵ISが攻撃を仕掛けてきたからだ

「よし、いくぜ！鈴！」

「OK！一夏」

と、その時

ドゴオオオオンッ！！！！

轟音と共に、敵ISはピンクの極太のビームの奔流に飲み込まれた

「な、なんだ！？」

「ちよっ・・・・・・・・あのISは！？」

砂煙の中から現れたのは、所々から火花を発している敵ISだった
そして、その反対側には、秋五のダブルオークアンタが立っていた

「秋五！」

「あ、あれ・・・あんたがやったの！？」

「ああ」

「でも、大丈夫なのか？人が乗っているんじゃない・・・」

「いや・・・あれは無人だ」

そう・・・そんな気がする

「マジか・・・ってまた撃ってくるぞ!」

敵ISが腕部ビーム砲を構える

それを見た俺は、バズターソードモードにしたGNソード?を構えて突撃し

「はあああああっ!」

ザシュツ!!!

敵ISを一刀両断にし、離れる
その刹那、爆散した

「マジかよ・・・」

「それが秋五の・・・力・・・」

『へえ、やるじゃない、あれを倒すなんてさ』

いきなりの謎の通信に、辺りを見渡すと
空に、グレーとダークグリーンの全身装甲フル・スキンのISがそこにいた

あれは記録で見た覚えがある。確か・・・ガラスゾだったか

「お前、誰だ!？」

『白いきみには用は無いの。用があるのはそのダブルオー・・・
いや』

『刹那・F・セイエイ』

俺を刹那・F・セイエイと間違えている?それにこの声は・・・
同じく記録で聞いた事がある。たしか・・・

「ヒリング・ケア」

『!?!?・・・あんだ、刹那・F・セイエイじゃないね?』

「俺の名前は織斑秋五だが?」

俺は、バスターソードを構える

一夏と鈴はわけがわからずに立ち尽くしている

『まあいいわ、形は変わっているけどダブルオーはダブルオーみた
いだし、悪いけど・・・いただくよ!』

そう言うや否や、こちらに突撃しGNビームクローを振りぬく
俺はそれをバスターソードで受けて、いなす

「秋五!」

「今助けに行くわよ!」

「ここは俺一人でやる。下がってくれ」

「でも・・・!」

「・・・わかった」

一夏が鈴を連れて離れる
まったく、頼りがいのある兄さんだ

「いくぞ!」

俺はソードビットを戻し、シールドビットを4基展開
それを相手に向かわせて、ライフルモードのGNソード?で狙い打つ

『シールドビット!? ダブルオーにそんな装備が……!』

さすがはソレスタルビーイングと戦っただけあって
ビットのビームを回避していく

だが……記録ではヒリング・ケアはアレルヤ・ハプティズムに落
とされたはず。なぜ、生きてしかもこの世界にいるんだ?

『はあああっ!』

再び切りかかってきたガラツゾの攻撃を回避し
そのまま下に蹴り落とそうとするも躲される

「よく躲す……だが!」

秋五の目がイノベイダーのそれへと変わる
ビットからビームを降らせながらガラツゾに突撃し

「でええええいっ!」

ザシュッ!

袈裟気味に斬りつけてはビットを操作しビームの雨を降らせていく

「ちっ……予想以上にダメージが大きいわね……」

『ヒリング』

「あ、ごめん、やられそうなんだけど」

『一旦、帰っておいで、今回は様子見だからね』

「了解、報告する事もあるしね。一旦帰投するわ」

通信を終えると、私はビームをかわしながら退避行動に入る

『待て！逃がさん！』

「ふふ……決着はまた今度。バイバイ」

そういつて戦闘区域を離脱する

途中までビットが追っていたけど、途中で引き返したようだ

「んっふふ・・・楽しくなってきた」

ヒリングはこれからの展開に胸を躍らせて帰投していった

「退却したか・・・」

俺はシールドビットを戻し、ヒリングが逃げたほうに視線をやる

ヒリング・ケア・・・アロウズ、イノベーターとソレスタルビーイングの最終決戦で死んだはずのイノベイドか・・・

再び空に視線をやる

どうやら、倒さなければいけない歪みがあるようだ。刹那・

F・セイエイ、力を貸してくれ・・・

空を見ながら、俺はそう願った

第十一話 2つの乱入者（後書き）

次回は鈴が堂々宣言してまいりますWWW

第十二話 対抗戦終了・・・そして

夕方

IS学園 地下五十メートル

?????

学園の地下五十メートルにあるこの区画は
学園でもレベル4の権限を持つものしか入れない場所
そこに千冬はいた

「・・・・・・・・・・」

千冬は先ほどの戦闘の映像を見ていた
ディスプレイの光りで照らされたその表情はとても冷たいものだった
・・・最初のIS乱入は大体見当がつく。・・・が後者は誰だ？あ
んなタイプのISは見た事が無い

映像を変える・・・そこにはクアンタとガラスゾの戦闘が映し出さ
れていた

格闘戦特化型か・・・しかし、コアはどこで手に入れた？まさか
とは思うが、後で問いただしてみるか

その時、ディスプレイに割り込みでウィンドウが開く
それには山田先生が写っていた

「織斑先生、よろしいでしょうか？」

「ぶっぞ」

許可をもらい、入ってきた山田先生の足は
いつもよりきびきびとしていた

「解析結果が出ました」

「うむ・・・どうだった？」

「やはり、あれは無人機です」

世界中で開発が進むISの、しかも完成していない技術
リモート・コントロール 『遠隔操作』と『スタンド・アロン独立稼動』

そのどちらか、あるいは両方があのISには使われている

この事実は、すぐさま学園関係者全員に箱口令かんこうれいが敷かれるほどだった

「どのような方法で動いていたかは不明です。秋五君のとどめの一撃で機能中枢が破壊されてしまったので……」

「そうか。コアのほうは？」

「幸い、攻撃が当たっていなかったので調査可能でしたが……登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな……と言葉を続ける千冬
その言葉に真耶は怪訝そうな表情をする

「何か心当たりでもあるんですか？」

「いや、無い。今は……」

「それから、その後に出てきた謎のISですが……」

「何かわかったか？」

「いえ……何も解からずじまいです」

「そうか……しかも、コアはおそらく未登録だろう」

しかも、有人・・・となると他国からの攻撃の可能性も入れなければならぬ・・・が

『ヒリング・ケア』

なぜ、秋五が敵の操縦者の名前を知っているのか？
そして、敵が秋五のISの名前を知っているのか？

「まだまだ、謎は多そうだな」

その表情は、教師のものではなく戦士のものになっていた
かつて、世界最高位の座にあった、伝説の操縦者
その鋭い瞳は、ただただ、映像を見つめていた

同時刻

「しかし・・・今日は大変だったな」

「まったくよ・・・折角、秋五と戦って認めさせるはずだったのに」

あれから、対抗戦は中止になった。当然といえば当然だが俺と一夏、セシリアに鈴に幕で学食で夕食を取っていた俺の晩御飯はとろろ飯定食。中々にはまってしまったな

「まだまだ、時間はある。強さは不変ではないからな」

「そ、そうよねえ・・・」

鈴が小さくガッツポーズをしている

まあ、不貞腐れているよりはいいだろう

「しかし、あのISはなんだったのだ？」

「確か、無人機だったよな？・・・そんな技術、あんのか？」

「わからないわね、中国でもそんな開発はしてないし」

そう、恐らくは世界でも完成どころか開発も儘ならぬだろう
刹那は一度見た事がある。東のラボで
この世界に来て、少しだけ無理を言っ
て見せてもらった
その中に、同じものがあつた・
確か

「ゴーレム・・・？」

「ん？なんだそれ」

「無人のISにつけるなら此れがいいと思つてな。それっぽいし」

「確かに・・・イメージはぴったりだな」

「そうですわね」

「それより驚きなのは、後から出てきたISだよな」

「ああ、あの黄緑っぽい色のISね」

ガラツゾ・・・か

「そついや、秋五は話したんだろ？操縦者と」

「ああ」

「どんな方でしたの？」

「女性だったな」

ここで、名前を言うわけにはいかんな

「・・・それだけなの？」

「ああ、名前もどこの人間かも言わなかったな」

「ふん・・・」

しかし、なぜここにイノベーターがいる？

ソレスタルビーイングに滅ぼされたはずの彼らが・・・
考えてもしょうがない。次に現れたときに聞き出せばいいか

「秋五、早く食えよ？」

「ん？ああ、わかった」

俺は、夕食を食べ終えて、廊下を歩いている途中で鈴に会った

「あ、秋五」

「鈴か」

「えっと・・・少し話したい事があって・・・」

「なんだ？」

妙にもじもじしている

まさか、「恋人から始めましょう」「なんてことは無いよな？」

「あ・・・あの、こっ・・・こっっ・・・」

まるで、鶏だな

「こ、これからさ・・・ISの実践訓練に混ぜてもいいかな？
・なんて」

なんだ・・・そんなことか

俺は少し胸をなでおろした気分になる

「構わないぞ」

「ほ、ほんとに！？やった！」

「ああ、セシリアや一夏と一緒にいいならな」

「……………」

喜びの表情から一転、一気に不機嫌な表情になってしまった鈴
なんか、まずい事でもいってしまったか

「……まあ、いいわ。実力の見せ所にもなるしね」

「そうか、がんばれよ」

俺は、そういって鈴の頭を撫でる
昔は泣いた鈴によくこうやったものだ

「わ、わかってるわよ!」

そういって、部屋に向かって歩き出す鈴
……さすがに恥ずかしかったか？

「俺も部屋に戻るか」

こうして、俺は波乱の一日を終えた

第十二話 対抗戦終了・・・そして（後書き）

そう簡単に恋人宣言はさせませんW

次回は転校生が・・・来るかも？

第十三話 転校生く動き始める影く（前書き）

久しぶりの更新w遅くなって申し訳ありません

他のお話も少しだけ文章変えたり減らしたりで変わってますので暇があれば読み返してもらっていただければ幸いです

第十三話 転校生、動き始める影

???

とある研究所、薄暗い部屋に四人の人影、その部屋で煌々と光るディスプレイに映し出されているのは、ダブルオークアンタとガラッゾの戦闘シーン
その部屋に、そのガラッゾを操っていた、ヒリング・ケアが入ってきた。その表情は非常に明るなものだった

「ただいまー」

「おかえり、ヒリング」

「で、どうだったんだい？『彼』は。楽しめたかい？」

「ええ。ボコボコにやられちゃったけどねー。でもあれは刹那・F・セイエイじゃなかったわよ」

「見ていたから分かっているよ、ヒリング。声も違っていたしね」

「でも、あいつ・・・織斑秋五って名乗ってたけど、イノベイターよ。脳量子波を感じたし」

「馬鹿な。あの男があ時代の人間だとしても、イノベーターであるはずがない」

そう。彼らがいた時代 西暦2312年、その時代にイノベーターと名乗っていたのは

『リボンス・アルマーク』

『リジエネ・レジエッタ』

『アニユー・リターナー』

『リヴァイブ・リバイバル』

『ブリング・スタビティ』

『デイバイン・ノウア』

そしてここにいる『ヒリング・ケア』

の七人。

因みに『ティエリア・アーデ』は自らを「人間だ」と言っていた為に除外した

その後、『純粹種』として覚醒した『刹那・F・セイエイ』が人類初のイノベーターとなり、ソレスタル・ビーイングがリボンス達イノベイドを倒した。

その後、ELSが出現。数度の戦闘を繰り返した後、刹那とELSとの対話を経て人類はELSとの共存を可能にした。

そして、人類の四割がイノベーターに進化し、ELSとの共存を進

めていく世界になったのだ

「でもあれは絶対にイノベーターだって！」

「ヒリング、いい加減に」

「今は彼がイノベーターかどうかなんて事はどうでもいいよ。僕たちがいた世界で対話が為された結果なのかもしれないからね。それよりも僕たちがこの世界に飛ばされた意味を考えるべきだよ」

「どういうことかな、？」

「この時代は僕たちの時代ほど酷くはない。だが『IS』の存在がこの時代を紛争の時代にする可能性がある」

緑髪の少年が近接特化型IS・ガラツゾを見る
その目は笑みを湛えている

「それがなんなわけ？」

「わからないかい？これは、僕の推測だが僕たちのいた世界は・・・刹那・F・セイエイが対話によって紛争のない世界になっているだろうね。そして・・・今度は僕たちがこの世界での刹那・F・セイエイの役割を担うべきじゃないかな？」

「・・・この世界で、人類を導く者達になる。・・・ということかい？」

「そういつことだよ。だが、そのためにはISが必要だね」

「そうだね。『幸い』ここに『棄てられていた』ISがあったし。それに、僕たちが目覚めたここが廃棄されたISの研究所ってのがさらに良かったよ」

「しかも、ライフラインは生きていたし、・・・いいことづくめよね」

緑髪の少年はその点が腑に落ちなかった

目覚めた場所が、ライフラインの生きている廃棄された研究所。そこにあつた棄てられていたIS。都合良くここにいるメンバー。・・・それを考えると、何者かにお膳立てされているとしか思えなかったのだ。

誰が？何の為に？

少年は、一度考えを捨てた。まずは戦力だ。この世界で通用するほどの戦力

「ヒリング。取り敢えずはISのコアの確保を頼もつかないかな？・・・五つほど」

「りょーかーい。暫くはそっちに専念するけどいい？」

「構わないよ」

こうして再び『イノベーター』が動き始める。

この世界の

秩序を確立するために

????

「奴らが現れた」

「そのようだな」

「だが、なぜ奴らがこの世界に？」

「そんなもん、知ったこつちやねえ。俺たちは奴らを叩き潰す」

「そうだ。僕たちや奴らはこの世界に居てはならないイレギュラーな存在だ。奴らがこの世界に干渉するならば……」

「俺たちが叩き潰す。そう、俺たち……」

『ソレスタル・ビーイングのガンダムマイスターがな』

彼らもまた、この世界で動き始める

この世界で新たに作られるであろう秩序を破壊する為に

IS学園 第三アリーナ

「よし」

クラス対抗戦から暫く経ち、今は六月初旬

俺は今、ISアリーナでISを稼働させるため、ここにいる
一夏は、中学の友達に会いに行ったらしい。確か名前は『五反田弾』
と言っらしい。一度会ってみたいものだ

俺は、ISを展開させる。実は、一度ハ口を抱えたまま展開したと
きに、そのままハ口も格納されてしまい、展開するときに同時に展
開されるようになってしまった。

しかも、GNシールドにあるGNドライブに組み込まれてしまっ
ていた。はつきり言って謎である。

だが、ここで考えていても解決しないので、俺は空中に飛び立ちタ
ーゲットマーカ―を出現させるその数、五十

「ハ口、シールドビット展開」

『了解、了解』

俺の声に合わせて、シールドビットが展開される。

イノベイダーに覚醒すると、強力な脳量子波、驚異的な空間認識能
力を得て、更には寿命が伸びるらしいのだが、秋五には実感がない。
というよりも、実際にまだビット類は六基展開するのがやっとである

最低でもあと三基は動かせるようになりたい。

「……………スタート」

俺の掛け声と同時に、スラスターを吹かせて飛び出すクアンタ。まず、出くわすのは二十五のターゲットマーカー。

「ハロ、シールドビット」

『ハロ、ハロ』

GNソード？をライフルモードにし、ターゲットを撃ち落とし、シールドビットの放つビームの雨によって多数のターゲットをまたたく間に落としていくその間、約十秒

そして、その下には二十のターゲットが、縦に並んでいた

「ハロ、シールドビット。アサルトモード」

『了解！』

シールドビットを格子状に組み合わせ、ターゲットを狙い撃つ。

アサルトモードで放つビームは通常よりも強力で、ビームが太いのでそのまま全てのターゲットを飲み込んでいく

そして、残りの五つのターゲットはGNソード？をソードモードに

し、五つ全てを斬り落とす

「……………終了。大体四十秒といったところか」

難易度は十段階中の五段階目。八口のサポートがあればこれぐらいは朝飯前だ

これをサポート無しでだと大体二、三分は掛かる

……………まだまだだな、俺も

昼

「ん？」

「あは」

食堂で出会ったのはセシリア。その手にはきのこのクリームスパがあつた

「秋五さんもお昼ですの？」

「ああ。今日は一夏もいないからな、一人で昼飯だ」

俺は食券を食堂のおばさんに渡す
今日の昼飯はカツカレーライス。ピリ辛具合が中々美味いんだ

「では、ご一緒しましょう」

「そうだな」

俺とセシリアは適当な席に腰掛けて昼飯を食べ始める
やはりカツカレーライスは美味い。

「今日は一夏さんはどちらに？」

「友達の家だそうだ。俺は面識がないからな、次の機会にでも会い

に行くさ」

「そうですの。・・・秋五さん！」

険しい顔で俺を見たセシリアがテーブル越しに詰め寄ってきた
うおっ・・・何だ？いきなり

「あつ！今度のお休みに一緒に」

「あー！秋五みーっけ！」

セシリアが話を切り出そうとしたその瞬間に後ろから声を掛けられた
振り向くと、そこに立っていたのは鈴と箒
その姿に、セシリアは悔しそうな表情になり、鈴と箒はニヤリと笑
みを浮かべる

・・・何かあるのか？この三人

「抜け駆けなんて百年早いだよ」

「全くだ」

「ちっ・・・あと少しでしたのに」

三人で何かヒソヒソと話しているが、よく聞こえないな
実は、仲がいいのか？この三人

因みに、二人のメニューは鈴は塩海鮮ラーメン。箸は焼き鯖定食だ

「今日はあと半日アリーナで自主練だが、三人とも付き合つか？」

この俺の言葉に、三人は飛びついてきた

「ぜ、ぜひ！わたくしで良ければ！」

「しょ、しょうがないわね！付き合ってあげようじゃないのよ」

「う、うむ、私で良ければ付き合ってやろう！」

三人ともやる気は充分らしい。いい自主練になりそうだ

その後は、四人で仲良く自主練を行なった。

三人が異様に睨み合っていたが・・・まあ、仲がいいほど喧嘩するとも言うしな

暖かく見守っていくとしよう

翌日

IS学園 一年一組教室

「諸君、おはよう」

「おはようございます!」

それまでざわついていた教室が静まり返りみんな席に着席する。これも姉さんの教育の賜物だろう。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用するの授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着でかまわんだろう」

それは道徳的にまずいのでは？

因みに学校指定のISスーツはタンクトップとスパッツをくっつけ

たような感じの、至ってシンプルなもの。ではなぜわざわざ学校指定のものがあるのに各人で用意するかというとISは百人百通りの仕様へと変化するものなので早い内から自分のスタイルというのを確立するのが大事なのだそう。皆が皆、専用機を貰えるというわけでは無いのでどこまで個別のスーツが役に立つか解らないがそこは個人の感性を優先させているのだろう。俺にはよくわからないが因みに、専用機持ちの特権に『パーソナライズ』がある。これを行うと、IS展開時にスーツも同時に展開される。着替える手間が省けて楽になる。着ている服は一時的に素粒子の分解されてISのデータ領域に格納される。ISスーツ込みのフォームチェンジはエネルギーを消費するので普通はスーツを着たままISを展開するのがベターだとか。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ。ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名ですよ」

「え・・・・・・・・」

「「「えええええっ!?!?!?!」」」

喧しい。だが、この季節に転校生なんて珍しいかもしれないな。何かの政治的策謀か、それとも企業関連の策謀か。・・・何にしても、警戒は必要だな
そんなことを考えているうちに、教室のドアが開いた

「失礼します」

「・・・・・・・・・・」

クラスに入ってきた2人の転校生を見て、ざわめきが止まる

それもそのはず

転校生の一人が男子だったからだ

第十四話 貴公子と軍人

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルル・デュノアはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

それを見ていた、俺以外の全員が驚いていた。俺はと言えば、デュノアを訝しげに見ていた。確か、社長から一人娘がいると聞いていたが……息子もいたのか？ そんな俺をよそに、周りの女子達は静かに燃えていた

「お、男……？」

「はい。此方に僕と同じ境遇の方々がいると聞いて本国より転入を

」

誰かが呟いた言葉に答えるシャルル。人なつっこそうな顔。礼儀正しい立ち振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪。黄金色のそれを首の後ろで丁寧に束ねている。体格も華奢でスマート。

自然に『貴公子』という言葉が当てはまる人物だ。

「きゃ」

「はい？」

「きゃあああああつー！！！！」

中心からソニックウェーブのごとく黄色い歓声が響き渡る。……冗談抜きで。

というか、本当に喧しいと思うのは俺だけだろうか？そろそろ男に慣れて欲しい

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜！」

そこまで言うことなのか？

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生が場を鎮めようとぼやく。表情がものすごく鬱陶しそうにしてるのは、多分素だ

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わっていませんから！」

どうやら、この騒ぎ様でもう一人の転校生がぼつんと忘れ去られたように立っていた。

輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを腰近くまで長く下ろしている。綺麗ではあるが整えている感じではない。ただ面倒だから伸ばしっぱなし。という印象のそれ。そして眼帯。

見えているほうの右目は真っ赤な赤色を宿しているが、その瞳は限りなく冷え切った感じだ。正直、俺はあまりいい印象を持ってない

なにせ雰囲気は軍人なのだ。身長はシャルルと比べたら小さい。だが、全身から放たれる冷たく鋭い気配がまるで同じ背丈に見せているように見える。デュノアも男子の中では低いほうだが、もう一人の転校生は女子の中でも若干背が低い

どうやら、シユヴァルツェア・ハーゼ『黒ウサギ部隊』の関係者が

軍人、眼帯とくれば今の時代ではそこが妥当なのだ。……絶対とは言い切れんが

「……………」

転校生は何も言わない。普通ならさっきの騒ぎでもまったく反応していない。こいつらなぞ興味がないといった感じだ。視線だけは姉さんに向いていたが

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直して素直に返事をする転校生にクラス一同ぽかんとする。対して異国の敬礼を向けられた姉さんは軽くため息をつきながら転校生に注意した

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるラウラはぴっと伸ばした手を体の真横につけ、脚を踵で合わせて背筋を伸ばしている。軍人は確定だな。これで一般人だったら逆立ちしてグラウンド五周してもいい

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは無慈悲な即答。この転校生、コミュニケーション能力は皆無なのか？
その転校生　ラウラ・ボーデヴィツヒは一夏と視線が合うなり、その表情を険しい物にしていった

「！……貴様が」

ボーデヴィツヒが一夏に歩み寄る。ライバル宣言でもする気か？
だが、ボーデヴィツヒは声をかけることもなく、ただ自らの手を振りかざし……
一夏に振り下ろす！

バシッ！

だが、ラウラの手は一夏の頬に当たることはなく、俺の手が振り下ろされるはずの手を掴んでいた。
それを見たボーデヴィツヒは俺の顔を見て、さらにその表情を険しくさせる

「織斑……秋五……！」

その刹那、ボーデヴィツヒの左腕が部分展開され、黒いISAーマーに包まれる。そして、その腕で手刀を放ってきた。
今の俺なら、当たれば即、肉塊になるだろうその攻撃をじっと見ていた

「止めんか、馬鹿者！」

そう言つて、姉さんがボーデヴィツヒの左腕を掴み、攻撃を止める。ボーデヴィツヒは驚いた表情で、姉さんは表情を変えず互いを見ていた

「学園内での許可無しのIS展開は認められていない。無論、部分展開もな。早々に展開を解除しろ」

「了解しました」

姉さんの言葉に素直に頷き、腕のISアーマーを展開解除させる
……………死ぬかと思つたぞ

「まったく。ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて姉さんが行動を促す。なんだかよくわからない様子で準備を始めるクラスのみんな。俺も直ぐに行かなければな、今日は第三アリーナの更衣室が空いてたはずだ

「一夏、秋五。デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だ、仲良くし

るよ」

「了解した」

俺が頷くと、姉さんはさっさと行ってしまった。

「君達が織斑兄弟だね。初めまして、僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

「うむ、急いだほうがいい」

そう説明すると同時に俺たちは行動を開始した。俺はデュノアの手をとり、一夏はその前を走りながら更衣室に向かう

「この学園に男子の更衣室は無いからな。着替えるときは毎回こんな感じだ」

「そ、そっか……」

妙に落ち着かない表情をしているな、デュノアは。

こうしているうちに、階段に差し掛かった

階段を下って一階に向かう。ここは階段を一段飛ばしで下りていく、ここで速度を落とすわけにはいかない。なぜならば

「ああっ、転校生発見！」

「しかも織斑君達と一緒に！」

HRが終わって、早速各学年各クラスから情報先取のための女子達が駆け出してきた。飲まれたら最後、質問攻めにあって遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っている。姉さんが厳しいのはこの二ヶ月で嫌というほど教わっている。ここで止まっているわけにはいかない

「いたわ！こっちよ！」

「者ども出会えい出会えい！」

ここはいつから武家屋敷になったんだ
と、そうこうしているうちに、周りを取り囲まれてしまった

「織斑君たちの黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃあああっ！見て見て、織斑君と転校生、手！手を繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん、今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

ちゃんとした花をプレゼントしろ

デュノアが困ったように俺を見てくるので、俺は一步前になる
それをじっと見る女子たち。そして、俺は言い放つ

「邪魔だ。授業に遅れる。今すぐに道を空ける」

その言葉に、共感してくれたのか女子たちはささつと道をあけてく
れた

少し、乱暴な言い方だったが……まあ、いいだろう
その後ろで、デュノアと一夏が申し訳なさそうについてくる
こうして無事(?)に通り抜けたのだが、途中で「秋五様……」と
か「もつと罵ってくださいます……」等が聞こえたが、無視。断固
無視した。

俺にそつちの気は無いだ

「い、いいのかな？あんな言い方で……」

「構わん。退かないあいつらが悪い」

「ま、まあ……これからよろしくな、俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「俺は織斑秋五だ。秋五でいい」

「わかったよ。なら僕のことシャルルって名前で呼んでもらっていいよ」

「OK、シャルル」

「了解した。シャルル」

俺たちは、そのまま校舎を出てその足で第三アリーナに向かう
どうやら、何とか時間には間に合いそうだ

「ふう……なんとか着いたな！」

「ああ。だが、時間がそろそろ危ない、早々に着替えたほうが良さ
そうだ」

「そうだね」

俺は、上着、ズボンをハンガーにかけ、シャツや下着を全て脱ぎさ
りISスーツを手早く着用する。その間約二分

「わあっ!?!」

いきなりの声に振り向くと一夏とシャルルが何か言い合っている。
シャルルは顔が赤い。恥ずかしいのか？

一夏達があーだこーだしているうちに俺は、シャツ等をたとんで、
一夏達に声をかける

「先に行くぞ」

といつても、こちらの話を聞いていなかったようなので、放ってお
いて先に更衣室を出る

グラウンドにはすでに織斑先生がいてみんなは姿勢よく並んでいる
俺も自分の定位置に並ぶ。……やはり、女子だけというのは慣れん

「遅い！」

スパアンツ！

今日も一夏の頭から小気味よい音が響き渡る

一夏とシャルルは結局、遅れてしまった。シャルルは転校初日ということから、厳罰は免れた。……とはいえ、厳しく怒られていたが。一夏は当然、出席簿で叩かれていた。急がんなら

ゴスツ！

「！！！？」

いきなりの拳骨に俺は目を白黒させる。

事情が飲み込めていない俺に、姉さんが淡々と言い放った

「転校生の面倒を見るといったはずだ。先に一人で来るなどもつての外だ。以後、気をつけるように」

「っ………了解した」

俺は、頭を摩りながら頷いた

「大丈夫ですか？秋五さん」

そう小声で声をかけてくるのは、俺の隣に居るセシリアだった

「問題はない」

「そうですね。そう言えば、今日の朝に一夏さんがボーデヴィツヒさんに叩かれそうになっていましたが、何か心当たりはありませんの？」

「いや、特に無い。後で一夏に聞いてみるといい」

「そうですね。……で、秋五さんは殺されかけてましたが、何か心当たりは？」

何か、微妙に声色が低くなっているが……どうしたんだ？

「無い。一度、ドイツに行ったことはあるが、会ったこともない」

「何、秋五なんかやったの？」

後ろの方を見ると、鈴が訝しげな表情でこっちを見ている

「此方の秋五さん。転校生の女子に殺されそうになりましたの」

「はあ！？アンタなんでそうバカなの！？」

「お前ほどバカじゃ」

と、俺の言葉が止まり、セシリアと鈴の視線が俺と同じ方向を見る。
その先には

「安心しろ。バカはわたしの目の前にも三名いる」

セシリアと鈴、そして俺はその視線の先の姉さんを凝視していた

スパアンツ！スパアンツ！スパアンツ！

小気味よい音が三連続、青空に吸い込まれていった

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はいっ！」

一組と二組の合同実習ということで、人数はいつもの二倍。帰ってくる返事にも気合が入っていた

「くうっ、何かというとすぐにポンポンと人の頭を……………っ！」

「…………秋五のせい秋五のせい秋五のせい…………」

後ろや横から文句が聞こえてくる

鈴に至っては、これはもう呪いと思えん。というか

「鈴、少し静かにしろ」

「煩い、元はといえばアンタのせいなんだから！」

ゲシッ！

文句を垂れつつ、俺のふくらはぎを蹴ってくる鈴。地味に痛い

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだな…………^{ファン}鳳！オルコット！それに、秋五もだ」

「な、なぜわたくしまで!?!」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

俺たち三人は前に出た。セシリアと鈴は渋々といった感じだ
そして、姉さんが二人に耳元で何かを囁く。 よく聞き取れん。
何を言っているんだ?

「やはりここはイギリス代表候補生のわたくしセシリア・オルコツトの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね、専用機持ちの!」

先ほどとは違って変わって恐ろしいほどにやる気を出している。姉さんは本当に何を言っただ?

「それで、相手はどちらに? わたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は 」

キイイイン……

何かが飛んでくる音がする。これは 山田先生か？

「あああーっ！！ど、どいてくださいっ！？」

俺は、飛翔し飛んでくる山田先生が展開しているISの右腕を掴み、こちらに引き寄せる。一夏直撃コースだったそれはちょうど俺の胸に収まる形になった

「あ、有難うございます。秋五君」

「気にするな」

山田先生は終始、頬を染めて秋五を見ていた。

「ああっ！やまぴーいいなあっ！」

「な、なんて羨ましすぎる……！」

「ああっ、私も抱かれないなあ………」

クラスメイトがきゃいきゃいと黄色い声を上げている

俺的には最後の子の言葉は聞かないことにしておく

はあっとため息をつく、ISからアラームが鳴る

俺は、得もしれない殺気に山田先生を突き飛ばして離れる。その直後に俺と山田先生がいた場所にB Tレーザーが通り過ぎる

「ホホホホ。残念です。外してしまいましたわ……………」

そこには笑っているがその顔には怒りマークが浮いてるのが見てわかる。『蒼穹の狙撃手』ことセシリア・オルコット（大逆鱗バージヨン）である。

「わたくし、あなたを殺し共に死にます！」

そんな無理心中、俺は断る

そして、反対側からは鈴が『双天牙月』を連結させる音がする。その目には殺気が込められている

「覚悟はできてんでしょうねえ？秋五」

どうやら、逃げ場はないらしい。姉さんも止める気はないらしい

「タッグマッチか、面白い」

面白いじゃないだろう、姉さん

「山田先生」

「何ですか？秋五君」

「取り敢えず、この二人を撃墜する。協力してくれ」

「わかりました」

いつものオドオドした感じはなく、ハキハキと答えている様子を見て驚く秋五。勿論、表情には出さないが。いつもそれだと姉さんも楽出来るだろうに……

まあ、それはさて置き

「行きますよ！」

「了解」

山田先生の合図で同時に飛び出す俺たち。それを追う鈴とセシリアそして、鈴vs俺、セシリアvs山田先生の構図が出来上がる。恐らくはセシリアが入試の時に一度山田先生に勝っているということなのだろうが……

「セシリアで山田先生を抑え切れるのか？」

「はん！今は自分の心配をしなさいよっ！」

「分かった……行くぞ！」

俺は、鈴に突撃し、斬り結ぶ
！

「さて、今の中に……そうだな。ちよつどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせる」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明を始めた

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で正式採用されています。特筆すべきはその操縦性の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性チロール・チェンジ役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、一旦そこまででいい。終わるぞ」

と、千冬の言葉で皆が上を向けば、山田先生が射撃でセシリアを誘導しているところで、秋五が鈴をそこに蹴り飛ばし二人をぶつける。そこに山田先生がグレネードを投擲。爆発が起こって煙の中から二つの影が地面に落下した

「くっ、うっ……。まさかこのわたくしが……っ！」

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避先読まれてんのよ！」

「り、鈴さんこそ！ 無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわー！」

「こっちの台詞よ！なんですべビットを出すのよ！しかもエネルギー一切れるの早いしー！」

「ぐぐぐぐ……っ！」

「ぎぎぎぎ……っ！」

どっちもどっちである

結局、お互いがお互いを罵り合うこのいがみ合いは千冬の出席簿アタックが炸裂するまで続いた

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて織斑先生がみんなの意識を切り替える
俺は、ISの起動を解除し、列に並ぶ

「専用機持ちは、一夏、秋五、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では九人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちが行うこと。いいな？では分かれる」

姉さんが言い終わるやいなや、女子たちがわらわらと俺、一夏、シヤルルに群がってくる

鬱陶しい、少しは女子のところに行けばいいのに

その女子三人は、誰も来ないことに、三者三様の反応を見せている

「なぜ、わたくしの所には誰もこないんですの!？」

「くう……！私は秋五に教えてもらいたかったなあ……」

「……………ふん」

まあ、セシリアの疑問には即答できるが……本人の名誉の為に黙っておこう

「織斑君！一緒に頑張ろう！」

「デュノア君！わかんないとこ教えて〜！」

「秋五様、ぜひ私に愛の鞭を……！」

待て、最後の俺に対してその科白はなんだ!？

俺の指導は懇切丁寧がモットーだ。痛ぶるなど、とても出来ない

俺が文句を言おうとすると、その背後からとてつもない怒気がこちらに向けられた

皆がそちらを向くと、その表情はまさに鬼神というべき、姉さんが立っており、低い声で最後通牒を告げる

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人づつ各グループに入れ！ 順番はさっき言った通り。次にもたつくようなことがあれば今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

先程まで、きやいきやいと騒いでいた女子たちは、すぐさま列を乱さずに並び始める。並び終えるまでの所要時間、一分半。……これが千冬効果というものか……。っ！

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

ふうっとため息をつく姉さんにバレないようにヒソヒソと小声で話し始める

「……やったあ。織斑君と同じ班っ。名字のおかげねっ……」

「……うー、セシリアか……。さっきボロ負けしてたし、はあ……」

「……鳳さん、よろしくね。後で織斑君達のお話聞かせてよねっ……」

「……デユノア君！ わからないことがあつたらなんでも聞いてね！ ちなみに私はフリーだよ！……」

「……ああ……秋五様是非このわたくしめに愛の鞭を……フフ、フフフフ……」

「……………」

……俺の班だけ、何か怖いのだが？

後ろから聞こえてくる不気味な笑い声に、思わず背筋をゾクリとさせた

そして、もう一つ、変わった班が、ボーデヴィツヒの班

会話がな。授業中におしゃべりが無いのは良いことなのだが、誰もボーデヴィツヒに話しかけない

というよりも、話しかけられないようだ

軽視を含めた冷たい視線。そして、人とのコミュニケーションを完全拒否するオーラ

さしもの十代乙女もこれには話しかけれずに俯いたままである

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一斑一体取りに来てください。数は『打鉄^{うちがね}』が三機、『リヴァイヴ』が三機です。好きなほうを班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

こうして、俺にとっての地獄の授業が始まった

某研究所 エントランス

「……………何だあ？ここは……………」

男が目を覚ます。ボサボサの手入れを全くしていない伸ばしっぱなしの赤い髪に、無精髭を生やし、宇宙服に身を包んだ男が、体を起こしたところで、非常に聞きなれた声を耳にする

「おや？君は……………なんでこんなところにいるんだい？」

「ああ？大将じゃねえか。俺もわけわかんねえってところだ……………大将は何やってんだい？」

「ちよつとね。……………そうだ、君にも協力してもらおうかな？ああ、でも死んで契約が切れてまっているかな？」

何とも意地の悪い笑みを浮かべて男を見つめ、不意に歩き出すリボ
ンズ

そんな表情をみて、男は全てを理解したように笑みを浮かべて、それを追いかけるように歩を進めながら言葉を紡ぐ

「へっ、ならもう一度契約させてもらっせ。あんたと一緒にいると
退屈しねえ」

「それは結構。少なくとも、僕が何もなくてもこの世界は君にと
って退屈しない世界だよ」

そして、とある部屋に入ればある一点に照明が当たる。そこには

「こりゃあ……！？」

「この世界にはISと呼ばれる兵器がある。今世界は少し均衡が崩
れるだけで世界大戦になだれ込む可能性もある。これを開発した人
間はよほどこの世界が嫌いなようだ」

「……へへ、なる」

「流石に、『アルケー』はまだ出来なかったけれど……今の君には
これでも十分戦果を上げることができるだろう。」

楽しみに話すリボンスの横からヒリングが男にちよっかいを出す

「あら、その男も『こっち』に来たの？……でも、男にそれが乗り
こなせるのかしら？」

「あん？どついつこつた？」

「ISは基本的に女性しか起動できないんだよ。例外はこの世に一人。君には、そのうちの一人である」

リボンスが標的の名を言おうとしたとき、男が遮るように言葉を挟んだ

「俺は降りるぜ。女しか乗れねえんなら、俺がいる意味がねえ」

そう言い放ち、出ていこうと背を向ける男

それを見越してか、思い出したようにリボンスが語る

「そうそう、言うのを忘れてたけど……そのISのコアは、僕らが作った試作一号なんだよ。男でも乗れる……ね」

背を向けていた男が止まり、顔だけをリボンスに向けてニヤリと笑みを浮かべる

「それならそうと早く言ってくれよ、大将。で、標的はなんて奴なんだい？」

「日本にあるIS操縦者育成機関『IS学園』一年一組 織斑秋五。彼はこちらの世界にやって来たイノベーターだ」

「なるほど……で、こいつを殺ればいいのかい？」

「ああ。そして、出来れば彼のIS『ダブルオークアンタ』の回収もお願いできるかな」

「了解……と言いたところだが、一発目はまずミスるぜ。それでもいいかい？」

「構わないよ」

「まずもって『スローネツヴアイ』じゃ、二個付きにや勝てねえ。

『アルケー』ならなんとかかってところだ。それまでは実践で戦闘データ取りだな」

「……期待しているよ。アリー・アル・サーシエス」

この世界に、『傭兵』と言う名の狂犬が放たれようとしていた。

「……どういうことだ？」

「ん？」

昼休み、俺達は屋上にいた

俺は一夏に「シャルルと一緒に飯を食おうぜ！」と言われたので、了承し、屋上に来たのだが、そこには一夏にシャルル。果てには篤、セシリア、鈴といったおなじみのメンバーがいた

一夏によれば、秋五の居所を聞かれ、一緒に飯を食うと言ったところ、三人ともついてきたらしい

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。それにシャルルは転向してきたばっかで右も左もわからないだろうし」

「それもそうだな」

確かに、シャルルは転向したばかりだ。男友達も大切だが、女友達も作っておいたほうがいいだろう

……とは言つものの、俺は今日弁当じゃないんだが……

「秋五 はい、これ」

鈴から、タッパに入った酢豚とご飯を渡される

「良いのか？鈴」

「い、いいいいの。私の分もあるし」

「そっか。では、いただきます」

両手を合わせて一礼。

タッパを開ける。ふわりと美味しそうな酢豚の香りが漂う。

その隣では、一夏とシャルルが食堂から持ってきた海鮮丼に舌づつみを打っていた

「さて……はむ……むぐむぐ」

「どう？美味しい？」

「ああ、美味しいな」

「そっか……」

俺の言葉に鈴は嬉しそうにし、お弁当を食べる

酢豚を頬張っていると、横から服を引っ張られる。視線を移すと、引っ張っていたのは筧だった

「何だ？筧」

「わ、私も弁当を作ってきたのだが……」

そう言いながら、おずおずと弁当を差し出してくる筈
俺はそれを受け取り、弁当の蓋を開ける

「これは……ふむ」

中身は、焼き鮭の切り身に、鳥の唐揚げ、きんぴらごぼうにほづれ
ん草のお干たしとバランスのいい献立に仕上がっている

「美味そうだな。さすが筈だ」

「つ、ついでだついで。あくまで私が自分で食べるために時間をか
けただけだ」

「そうか。だが、それでも嬉しいさ。ありがとう、筈」

「ふ、ふん……っ!」

どうとでも言え。といった感じでそっぽを向かれました
だが、その頬は赤みがかつてうたように見えたが……気のせいだろう
まあ、せっかく貰った弁当だ、いただきこう。俺は唐揚げを箸で摘ん
で口に入れる

「むぐむぐ……美味しいな。冷めてはいるが、この食感はすごいな。それに……生姜に醤油に……ニンニクか？」

「よくわかったな」

嬉しそうに頬を緩ませる箒を見ながら、もう一つ唐揚げを頬張るが、俺はあることに気づく

「……箒、お前の弁当には唐揚げがないが……何故だ？」

「む……そ、それはだな……」

箒は、うまく言葉が紡げずにもっとしまっ

理由は、うまく出来た唐揚げが、秋五に渡した弁当に入っている分だけなのだ

勿論、秋五はそれを知らない。箒は取り繕うように言い訳をした

「わ、私は今ダイエット中なのだ、だから気にせず食べるといい」

「ふむ……」

俺は、唐揚げを一口齧るが、やはり納得がいかず、唐揚げを切り分け箸でつまんで、箒に差し出す

「な、なに？」

「食べる。箒」

「だ、だから私はだな」

言い訳をする箒の言葉を、俺は一蹴する

「その体型でダイエットなど不要だ。さあ、食べる」

さあ。と言いながらずいといと箒の口元に唐揚げを差し出す

「あ、これってもしかして、日本のカップルが良くやる『はい、あーん』ってやつだね。仲睦まじいね」

この一言で、セシリアと鈴が不満を爆発させた

「ちょっと！　なんでこいつらが仲いいのよ！」

「そうですわ！　発言の撤回を要求しますわ！」

ぎゃいぎゃいとシャルルに詰め寄る鈴とセシリア。それでも笑顔を決然と見せるのは、ノブレス・オブリージュ『貴族の義務』というやつだろうか？

「だったら、みんなで食べさせあいっこしたらどう？ うん、それがいいよ」

「俺はいいぜ」

「俺も、一向に構わない」

「あたしは、秋五がいつて言うんなら……付き合っただけてもいいわよ」

「わたくしは本来ならばそのようなテーブルマナーを損ねるような行為はよしとはいいたしません、今日は平日でここは日本、一『郷に入っては郷に従え』(ゴーイング・ゴー)ですわね」

という訳で、全員参加が決まった

「じゃ、早速もーらいつ！」

と、鈴が俺の箸から唐揚げを奪う

「むぐむぐ……む、なかなかやるわね」

「ふっ。和の伝統を重んじればこそだ」

何やら、二人の間で争い合つような視線をぶつけ合っているのだが、俺にはよくわからん。だが……純然たる事実が一つ

「すまない、箒。どうやら唐揚げが一つしかなくなってしまった」

「そ、そうか……」

箒は、俺の齧った唐揚げを凝視している……
……食べたいのだろうか？

「俺の齧ったのしかないが、食べるか？」

「えー？あ……いや……」

「ああ、やはり俺が齧ったのでは食べにくいか。しかし、他の惣菜のメニューは全て同じだからな。どうするか……」

「わ、私は……口がついていても構わない、構わないぞ」

「そうか。では……はい、あーん」

「あ、あーん……」

少し、ぎこちないが口を開けて唐揚げを頬張る箒
その頬は心無しか赤い。さすがにこの歳でこの行為は照れてしまっ

ただらうか？

「……いい……ものだな」

「そうか。それは良かった」

「むむ」

どつちやら喜んでもらえたようだ

「秋五！酢豚食べなさい！はい、酢豚！」

「秋五さん！私のサンドイッチもどうぞ。ひとつと言わず、全部！」

恐るべき勢いで酢豚とサンドイッチを突き出す鈴とセシリア
さすがに、この勢いに押されそうになる

「わ、わかった……なら、まずは酢豚から貰おうか」

ぱあっと笑顔になる鈴。俺は、差し出される酢豚を頬張る

「むぐ……ん？なんでこの酢豚はあつたかいんだ？」

「ご飯買ってきたときに温めなおしたのよ」

「そうか」

出来れば、俺の分も温めて欲しかったが……まあ、今更言ってもしょうがない

「こほん……では、わたくしの手作りサンドイッチもどうぞ」

セシリアがサンドイッチを薦めてくる。だが、俺は躊躇してしまう。セシリアの作る料理は見た目はいいのだが味は壊滅的なのだ。……味見、してるのか？

今日こそ、まともになっているといいが

「では、頂こうか」

「どうぞ」

俺は、サンドイッチを頬張る　　が

「……………」

ものすごく甘い

何だこれは？フルーツサンド……だが、ほのかにバニラの香りがする。……何を入れた！？

「ちょ……大丈夫、秋五！？」

「鈴さん！その台詞はいただけないですよ！？」

「……セシリア。何を入れたかは知らないが、ものすごく甘い」

「まさか……そんなはずは」

セシリアが自信満々にサンドイッチを頬張る

……！！？

「そ、そんな……甘いですわ」

「恐らくは、見た目だけで作って味を疎かにしていたんだろう。どつせならセシリアのメイドさんにも聞いてたらどうだ？」

「はい、そういたしますわ……次こそは必ず……！！」

ちゃんと習ってくれば、次は期待できそうだ

「ふうん、あんたって女の子に優しいんだ？」

俺の顔を訝しげに見てくる鈴

「そんなことはない。男にも優しいと思うが」

「そういうことじゃないんだけど……まあいいわ」

その後、一夏がシャルルに「男同士っていいよな」といって、女子トリオから白い目で見られ続けた

第十四話 貴公子と軍人（後書き）

……お久しですw

少々ばかり遅れてしまいました

第十五話 織斑秋五の災難（に遭ってない気もする）（前書き）

更新がめっちゃ遅れました……

第十五話 織斑秋五の災難（に遭ってない気もする）

IS学園 第三アリーナ

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……」

シャルルが転校してきてから五日。今日は土曜日。IS学園では土曜の午後は自由時間になっている。ということでアリーナを全開放している

自由時間だけあって、ほとんどの生徒が実習のために、アリーナを利用する

今日は、一夏がシャルルにレクチャーを受けると聞いたので、付いてきたのだ

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……、確かに。『イグニッション・ブースト 瞬時加速』も読まれていたしな……」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

確かにシャルルの言う通り、一夏の瞬時加速は直線的で軌道予測しやすい

俺ですら、その動きに攻撃を合わせやすいのだ、セシリア達ならばそれ以上にやりやすいだろう

そして、俺の後ろでは一夏の自称コーチ達が不機嫌そうに一夏を睨んでいた。一夏がシャルルに鞍替えしたためだ

因みに、三人がどのように教えていたかというところ

『こっ、ずばーっとなってから、がきんっ！ どかんっ！ という感じだ』

『何となくわかるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？ 何でわからないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

俺でもよくわからない。一番わかるかもというのはセシリアだが戦闘中に、五度や二十度なんて角度をいちいち考えていられないまあ、一夏には別の理由もあるのだろうが……な

「ふん、私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてあげたのに、何よ」

「私の理路整然とした説明の何が不満だと言うのかしら」

まあ、気持ちは分からなくもないが、どう相手に理解してもらうかが重要だ

自分わかる言い方しかないようでは指導者としてはいかがと思うさて、俺は少しクアンタでも動かすか

俺はクアンタを起動させ、飛翔する

そして、次々に現れるターゲットマークに正確に攻撃を当てていく次に現れるターゲットは、通常のISのスピードで動いている

「ハ口、シールドビット展開」

『シールドビット展開、シールドビット展開』

GNシールドと太陽炉のシールドビットがパージされ、ターゲットに向かう

移動するターゲットマーカー五十個を二十秒ほどで全て落とす

「ふむ、いい感じだ」

と言っても、ターゲットマーカーは上下や左右にしか動かないので落とすのは簡単だ。後は

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

シールドビットを全基戻し、地面に降り立ったところで騒がれている人物に視線を移した

そこに居たのはドイツからの転校生、ラウラ・ボーデヴィツヒ

転校以来、誰ともつるまず、誰とも話さない孤高の転校生だ

唯一、話しかけるのが苦手な女子だ。と言っても、女子に滅多に話しかけないが

「おい」

オーブン・チャネル
開放回線で通信が来た

誰かと思えば、相手はドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ
まさか、話しかけられるとは思っていなかったので、少し狼狽して
しまった

少しでも、親睦を深められれば……そう思い、返事に答えた

それが、無駄だと思わずに

「なんだ？」

「聞いたところ、貴様等も専用機持ちだそうだな？ 丁度いい、私
と戦え」

「断る。俺は戦う理由がない」

「ふん……貴様には無くともこちらにはある」

はて、俺はボーデヴィツヒに何かしただろうか？
一夏に……というなら理由もわかるのだが

第二回 モンド・グロツソ決勝

その日、一夏が謎の組織に誘拐された。後にその組織は『亡国機業』
ということが分かった

姉さんは、一夏を助けるために決勝を放棄。無事に一夏を救出した

その誘拐事件は一般には公表されなかった。だが、ドイツ軍がいち早く一夏の監禁場所の情報を入手していたドイツ軍は全容を大体把握していた

そして、姉さんがドイツ軍からの情報で一夏を救出した『借り』があつたために、モンド・グロツソ終了後の一年少しをドイツ軍の教官として過ごしていた

これは14歳のときにドイツで姉さんに会ったときに事の経緯を聞いたのだ

そして、ボーデヴィツヒが転校してきた初日、放課後の廊下で一夏は

『貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し得ただろうことは容易に想像できる。故に、私は貴様を　　貴様の存在を認めない……！』

と言われた。故に一夏が勝負を挑まれる云われはあつても俺にはない……はずなんだがな

「貴様さえいなければ、教官がこれ以上変わることはない。故に私は貴様の存在を認めない……必ず抹消する！」

訳が分からん

俺は姉さんを変えた覚えもないし、抹消される覚えもない

「またいつかな」

「ふん、ならば 戦わざるを得ないようじにしてやるっ!」

その瞬間、ボーデヴィツヒのISが戦闘シフトに移行、刹那
左肩の実弾砲が火を吹いた

ガキインツ!!!

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いんだね。ビールと同じで頭もホットなのかな?」

「貴様……!!」

横から割り込んできたシャルルがシールドで実弾を弾き、同時に右腕に61口径アサルトカノン『ガラム』を展開してラウラに向ける

「フランスの第二世代型アンテイクごときで私の前に立ちただかるとはな

「未だに量産の目処が立たないドイツの第三世代型ルキよりは動けるだろっからね」

お互いに涼しい顔をした睨み合いが続く

俺は、シャルルの技能に驚いていた

攻撃を防御してからの武器の展開の速さはどうか。防御したと同時に展開、銃口をボーデヴィツヒに向けていた

……なるほど、これがフランス代表候補生の実力か

「その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！」

突然、スピーカーからの怒号。どうやら一部始終を見ていた教師が見かねて口を挟んだようだ

「……ふん、今日は引こう」

流石に、二度も邪魔をされて興が削がれたのか、あっさりと戦闘態勢を解除し、ピットに向かう
そのピットでは、怒り状態の教師がいるのだろうか、恐らくは無視だろうな

「大丈夫？秋五」

「ああ、すまない。シャルル」

先程までの鋭い表情が、今はもう柔らかい笑みをたたえた表情にな

つていた

俺にあれをやれと言われたら

……無理だな

「今日はもう上がるっか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね」

「そっだな」

ISの起動を解除し、みんなと更衣室に向かうその途中

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれないことを言うなよ」

「つれないっていつか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

「というか、どうしてシャルルは俺と着替えたがらないんだ？」

一夏が、しきりにシャルルを着替えに誘っている

そのさまはまさに、女の子をナンパしてる男に見えた……気がした確かに、シャルルは少し敬遠しすぎな気もするが、それ以上に一夏がしつこい

「どうしてって……その、は、恥ずかしいから……」

「慣れれば大丈夫。さあ、一緒に着替えようぜ」

「いや、えつと、えーと……」

シャルルが困った表情でこちらを見てくる………というか、もう助けを求めているようだ

……一夏には少し痛い目にあってもらおうか

「なあ、シャル」

ゴスツ!!!!!!

「!?!?」

一夏の後頭部にげんこつが見舞われる

何事かと一顆が振り返ると、そこに立っていたのは秋五だった
最近、やることが千冬姉に似てきた。そう思う一夏だった

「なにすんだよ!」

「シャルルが困っていたからな。しつこい奴は嫌われるぞ」

「……それもそうだな。友達には嫌われたくないし……秋五と着替えるか」

「うん！そうしなよ、一夏。僕はISの調整があるから先に行つてなよ」

シャルルに促され、俺たちは更衣室に向かった

同時刻

一夏がシャルルと実習をしている頃

某研究所

「よう、今戻ったぜ」

「お帰りなさい、ロックオン」

日本のとある研究所。ここに自らの存在を隠し、活動している組織がある…

ソレスタル・ビーイング

全世界の紛争に介入し、最終的には世界の抑止力活動を続け、E L Sとの最終決戦の折、人類をE L S共存へと導く
その後は、再び表舞台から消え、小さな紛争やテロを未然に防ぐ活動に従事していた

今のメンバーは、アロウズの最終決戦に参加していたメンバーで、リボンス達がこの世界に来たのと同時に、この世界のこの研究所に出現した

因みに、組織の活動を隠すために、カモフラージュとしてISの武装修理や開発を行う『エウクレイデス社』を名乗っている。実際に仕事も請け負っている

そして、ロックオンが戻ったとの報告に皆が研究所の一室に集まっていた

「偵察任務、ご苦労様。ロックオン」

「いやー、しかし便利だねえ、ISってのは。あそこまで近づいても気付かれねえのな」

「ISのステルス性はこの世界では最高峰だ。まず、気づかれないだろう…で、どうだった？『IS学園』は」

「気になるのが二つあった。見てくれ」

ロックオンが研究所のデータベースに記録した映像を転送し、フェルトがそれを画面に映し出すそこに写っていたのは

「な……っ、ガラスゾだと!？」

「馬鹿な!あの機体は僕たちが落とすはずなのに…!」

「ああ。居ないはずの奴がこの世界にいる」

「それだけじゃねえ」

そのまま映像が進むと、ガラスゾと対峙する機体を見て刹那が呟く

「……エクシア……いや、これは」

「そつだ。見た目は酷似しているが別モンだ」

「ああ。だが、問題はそこじゃない」

「どづいつこと、刹那？」

いまいち理解出来ないといった感じのスメラギが問いかけてくる
その問いに、刹那は抑揚なく応えた

「あの機体は、ツインドライブを有している」

その刹那の言葉に、ロックオン以外の皆が驚愕の表情になる

「なんですつて!?!」

「バカな! あのシステムは」

「ああ、俺たちソレスタル・ビーイングだけの技術だ。リボンスはその技術を奪って完成させたが……」

「あれは、擬似太陽炉では無い……本物の太陽炉だ。一体どこで……?」

皆が一様に黙り込むさなか、イアンだけがブツブツと何かを呟いて

いた

「どうしたの？イアン」

「いや……あの機体、どーっかで見えた気がするんだが……どこだったかな？」

「イアンが見たことがあるならば、俺たちも見ているはずだが……」

「わからん……もしかしたらデータベースで見たのかもしれない、ミレイナ、後で調べておいてくれんか？」

「了解です！」

「……どちらにしろ、一度接触してみるべきだな」

「ああ。あの機体の出どころを聞き出さねばな。情報が漏れているとしたら由々しき問題だ」

「なら、次も俺が行って、確かめてきてやるよ」

「……それでは、イアンは早急に『四機』の完成を急がせて。ミレイナはデータベースを洗い出して、謎の機体の特定をお願い。後のみんなは通常作業に戻って頂戴」

「了解！」

「了解です〜！」

ソレスタル・ビーイングと秋五の線が、交わろうとしていた

「しかしまあ、贅沢っちゃ贅沢だよな」

「ああ」

一夏と秋五は、無駄にだだっ広い更衣室で着替えていた。だだっ広いのは、元々が女子のために用意されていたのを、たったの三人で使っているため。決して無駄な創りではない。男子が少な

いのがいけないのだ

ベンチに腰掛け、ISスーツを脱ぐ一夏の横で、既に秋五は上着を羽織っていた

「うおっ……！秋五、着替えるのはえーな」

「一夏が遅いだけだ」

「何か、早く着替えるコツがあるのか？」

「だから」

無い。と言おうとしたとき、更衣室のドアの方から声がした

「あの一、織斑君とデュノア君はいますかー？」

声の主は山田先生。秋五はドアを開けようとするが、一夏がまだ着替え中なのを見て

「一夏がまだ着替えている。一分待ってくれ」

「はい、わかりました。　いーち、にーい、さーん　」

余りにも子供っぽい時間の数え方に、秋五は年を誤魔化しているのでは？と疑ってしまった
そして、一夏は一分での着替えを迫られ、修吾を軽く恨んだとか恨まなかったとか。

一分後

「じゅじゅはーち、じゅきゅー、ろくじゅー。もういいですかあ？」

「ああ、構わない」

「そうですか、では失礼しますね」

バシユツとドアが開いて、山田先生が入ってくる
今日も、圧縮空気の開閉音が小気味よい

「えっと、デュノア君は一緒ではないんですか？今日は一夏君との実習って聞いてましたけど？」

「シャルルは一人残って、ISの調整をしている。今はピットだと思うが…呼ぶか？」

「いえ、そこまで大事な話ではないので一夏君と秋五君の方から伝えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別にすると問題が起きそうだったので、男子は週二回の使用日を設けることにしました」

「本当ですか！」

これに食いついたのは、一夏だった

……そう言えば、一夏は風呂好きだったな

一夏は感激のあまり、山田先生の手を取って言葉を続ける

「嬉しいです。助かります。有難うございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから……」

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます」

「そ、そうですか？　そう言われるとなんだか照れちゃいますね。あはは……」

俺は、やれやれといった感じで、二人を見ていた
状況的には、熱心に女教師の手を握る男子高生

……嫌な予感がするな

「……二人とも、何してるの？」

俺と一夏は声のする方に同時に振り向く。そこにはISスーツを着たシャルルがいた。特に一夏の表情はすごくおどろいていたが……何か後ろめたいことがあるのだろうか？

「……シャルルか」

「まだ更衣室にいたんだ。それで、一夏は先生の手を握って何してるの？」

「あ、いや、何でもない」

手を離す一夏。急に恥ずかしくなったのか、くるっと背を向けてしまつ山田先生

……まるで、付き合っている彼女に密会がバレたシーンのようだ

「一夏、先に戻っててっていったよね？」

「お、おう、すまん。…あ、そうだ。喜べシャルル。今月の末から大浴場が使えるらしいぞ」

「そう」

短く、言葉を吐き捨てて、一夏を狼狽させた後に、タオルで頭を拭き始める

……「ご機嫌ナナメのようだ。ここは一旦、別れたほうがよさそうだ

「一夏、そろそろ行くぞ」

「ああ、そう言えばお二人にはもう一つ大事な用件があったんです。ちよつと書いて欲しい書類があるので、職員室まで来てもらえますか？ お二人のISの登録に関する大切な書類なので、少し枚数が多いんですけど……」

「了解した。すぐに行くこつ」

「じゃあ、シャルル。ちよつと長くなりそうだから今日は先にシャワー先に使つててくれよ」

「あ、うん…わかった」

「では、行くぞ」

「……………。はぁ……………」

ドアを閉めて、寮の自室に一人だけになったところで大きくため息をついた
そのため息の大きさに、ため息をついたシャルル本人が一番驚いたほどだ

「まったく。何をイライラしているんだか……………」

さっきの更衣室での態度が今になって恥ずかしくなってくる。きっと、一夏も秋五も面食らっていたに違いない
そう思うと、更に落ち込み具合に拍車がかかる

「……シャワーでも浴びて、気分を変えよう」

シャルルはクローゼットから着替えを出して、シャワー室に向かった

「ん〜っ！意外に早く終わったな」

「ああ。もっと色々と書くのかと思ったがな」

職員室で書かされた書類は、殆どが名前を記入するだけの物だった
まあ、これで正式にクアンタの正式な登録者になった。ただ、山田
先生は事務的なものだと言っていたので、これで特に何かが変わる
と言っわけでもないだろう

「だな。あ、部屋寄ってくか？茶ぐらいは出すぜ」

「……たまには良いだろう」

こうして、一夏の部屋に寄ることになった…のだが

「ただいまー。ってシャルル居ないのか？」

「そのようだな」

と、一夏が奥に進もうとしたところで呼び止められる

「ああ、こんなところにいたのか、一夏」

「ちふ……お、織斑先生？」

声の主は、我らが姉、千冬姉さん

こんなところまで、一体何の用なのだろうか？

「すこし、一夏のISの操縦技術を見てやろうと思ってな。ああ、時間は取らせない、十分ほどで終わらせるからな」

また、唐突だな

「え？いつも授業で見てもらってるから」

「なあに、気にするな、すぐに終わる」

そう言う千冬姉さんのオーラはやけにどす黒い。一夏、何かしたのか？

「ええっ！？わ、訳わかんねえ……わりい、すぐもどるから、適当に部屋でくつろいでてくれ」

「……わかった」

とてつもなく、嫌な予感がするのは俺だけだろうか？

……まあ、いいか

一夏も死ぬことはないだろう。帰ってくるのを待つか
俺は一夏の部屋に入り、適当に茶をいれて待つことにした

と、部屋に入ったところで、シャワールームから音が聞こえた

「……そう言えば、シャルルと同室だったな」

そんなことを思い出しながら、台所に入り、茶を入れることにした
そして、茶を入れベッドに腰掛け、茶を飲む

……やはり、茶は緑茶に限る

なんてことを考えていると、シャワールームからシャルルが出てき

「
は？」

「え？」

シャワールームから出てきたのは……

シャルルと言う名の女子だった

なんで？

第十六話 シャルロット

「……………」

シャルルが着替えを持ってシャワールームに逃げ込んで数分

秋五は、茶を一口飲んでベッドに座っていた

表情は、平静を保ってはいるが、内心は非常に戸惑っている

それはそうだ。男だと思っていたシャルルは実は女だったのだから

……

だが、これでシャルルが俺たちと着替えをしたがらない事も説明がつく

「確かに、女と一緒に着替えるのは恥ずかしいか……………」

得心がいったように頷いていると、シャワールームからシャルルが出てきた

そこに居たのは

ひとりの女子だった

「……………」

「……………」

シャルルが、向かい側のベッドに腰掛けてから、はや小一時間……シャルルは顔を俯かせて体を少しもじもじさせながら、時折、チラツと俺を見てはまた顔を俯かせる
そんなシャルルを、俺はじっと見ていただけだった。向こうから、何かしら話してくるものかと思っていたのだが……このままでは進むものも進まない

「シャルル」

「はっ、はい!?!」

「茶を入れようか?」

びくつと背筋を伸ばして返事をしたシャルルだったが、「茶を入れようか?」と言った俺の科白にポカンとしていたが、次の瞬間には顔を真っ赤にして俯きながら小さくコクリと頷いた

頷くシャルルを見てから立ち上がり、台所に向かう

「そう言えば、一夏は遅いな」

まあ、この状況で入ってこられても困るが

そんなことを考えながら、カップを一つ出して、俺の使っていた湯呑み（一夏の物）とカップに茶を入れてシャルルのところに戻る

「これを飲んで、少し気分を落ち着かせろ」

シャルルのことだ、既に落ち着いているかもしれないが、一応言うておく

そんな俺の気持ちを察したのだろうか、コクンと頷き、カップの茶（紅茶）を一口飲む

そして……俺も一口、茶（緑茶）を飲んだところで、話を切り出した

「さて、いろいろ聞きたいことはあるが……まずは、お前の素性を明かしてもらおうか」

幾分、厳しい言い方かもしれないが……身分を偽ってここにいるのだ。万一にも、リボンズら『イノベイター』の組織の一員だとしたら後々が面倒だ。その時は
とはいえ、大体の検討はついているのだが

眼光を鋭くしながら見つめる俺にシャルルは、重く……だが、はっきりとした口調で答えた

「シャルロット・デュノア

デュノア社の社長令嬢だよ」

「……そうか」

やはりな……

前にデュノア社に見学に向かった際に、エントランスの受付で『シャルロットお嬢様』と呼ばれていた子が揉めていた

……まあ、その時は特に気にしなかったが、その後に、社長から『シャルロット』という単語を聞いて成程と思ったのを覚えている

ただ、何故揉めていたかまでは知らない。他人が聞くことでもないと思ったからな

「で、その社長令嬢が、何故、男装してまでIS学園に？普通に女子で入ればいいんじゃないのか？」

「……実家からそうしろって言われて」

「実家……？ああ、デュノア社か」

「そう、僕の父がその社長。その人からの直接の命令なんだよ」

「命令……親が子にか？」

「うん。僕は、愛人の子だからね」

……そういうことが

「引き取られたのが二年前。丁度、お母さんがなくなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々検査する過程でIS適応が高いことが分かって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルル　シャルロットは、特に顔色を変えることなく、淡々と喋っていた

内心は、どんな気持ちで語っているのだろうか……？
そんなことを考えている間も、シャルルの話は続いていく

「父に会ったのは二回くらい。会話は数回かな……。普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよねえ……母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

正直、今の話は俺にとってどうでもよかった

俺には親と過ごした記憶も愛された記憶も無い
だが、そんな俺でも子供とは、父と母が愛し合った結果に生まれ出
ずる新たな命であり、更にその子が人を愛し、また子を産み
そうやって人類は種を増やし、生き延びてきたのだ。と千冬姉さん
に習った

シャルロットは愛人の子だから父に愛されなかったのだろうか？も
し愛されていたのだとしたら……本妻の態度に何も言わなかったの

だろうか？気になるところではある
……だが今、俺が聞きたいのは

「シャルロット、俺が聞きたいのはそういう話ではない」

「あ……う、うん……そうだね」

シャルロットは、少し罰が悪そうな笑顔を見せて頷く
少し、キツかったろうか？だが、今の俺にはそれを気にしている余
裕はない

「……さっきの話から少しして、デュノア社は経営危機に陥ったの」
「イグニッション・プランに関係しているのか」

「うん……。リヴァイブがいくら世界第三位のシェアを持っていて
も、所詮は第二世代型。知っているとと思うけど、ISを開発するには
物凄くお金がかかるんだ。ほとんどの企業が国からの支援があつて
やっと成り立っているのが現状なんだよ。フランスは欧州連合の統
合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されてるの。だか
ら、第三世代型の開発は急務なの」

イグニッション・プラン

欧州連合の統合防衛計画で、いつか、セシリアに聞いた話では、今
は第三次イグニッション・プランの次期主力機の選定中だそうだ

今のところ、トライアルに参加しているのはイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型タイプ、実用化ではイギリスが一步前に出ているが、まだわからないそう。そのため、実稼働データを取るためにセシリアがIS学園に来たそう。

おそらく、ラウラ・ボーデヴィツヒもその関係でIS学園に来たのだろう。

「それで、デュノア社も第三世代型を開発していたんだけど、元々が遅れに遅れての第二世代型最後発だからね……圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだ。それで

「政府から予算を大幅カット。次のトライアルに選ばれなかった場合は援助を全面カット。ついでにISの開発許可も剥奪」と言ったところか？」

「あ……うん、そうだよ」

「だが、それとシャルロットが男装するのがつながらないが？」

「ああ、それは注目を集めるための広告塔だよ」

「プロパガンダのようなものか」

「うん。それに」

シャルルはどこか苛ついた表情で答える

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう　　ってね」

「……………何？」

「つまりは、白式とクアンタのデータを盗んでこいって言われているんだよ。僕は、あの人にね」

シャルロットの話を聞く限りでは、その父親に一方的に利用されているのだろう。そしてそれは本人が一番分かっているのだろう

「成程な。だが、本当にそれは社長の言葉か？まさかとは思うが、裏に何者かがいるとかではないのか？」

「ええっ！？……………流石にわからないよ……………。頻繁に会っていたわけじゃないし」

「……………そうか、すまない」

「いいよ。どうせ秋五にバレちゃったし、しばらくしたら本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……………潰れるか他の企業の傘下に入ることになるだろうけど、もうどうでもいいかな」

「そうか。だがな、シャルロット」

結局は、黒幕がいるかどうかもわからなかった
普通ならばこれで先生に言えば終わりなのだが、俺はシャルロット
を放ってはおけなかった

「お前は、このままでいいのか？」

「え……？」

「このままだと、代表候補生から下ろされて、果ては牢屋行きだぞ
？」

「仕方ないよ。僕に選ぶ権利は無いんだから……」

「選ぶ権利は無いか。……シャルロット、特記事項二十一を言っ
てみる」

「え？……本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる
国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意無き場合、それらの
外的介入は原則として許可されないものとする　　だよな？でも
これがどうしたって……あっ！」

「そうだ。お前は確かに選ぶ権利は無い。この学園で三年は過ぎさ
ないと、企業はおろか、国家も手を出せないのだからな。その間に、
どうにかすればいいだろう。時間はまだ二年半もある」

「だけど……いいのかな……」

「ならば、どうするか自分で決める。……まあ、俺はここいてもい

いと思うがな
「

そう言って、俺は立ち上がり部屋を出ようとする
と、そこでシャルロットに呼び止められる

「秋五
」

「なんだ？
」

「……ありがとう
」

「気にするな。ちゃんと『男』に戻っておけよ
」

「…………ふう」

「あら、秋五さん？こんなところで何をしていたらっしゃるのですか？」

「夏の部屋を出たところで、セシリアに鉢合わせてしまった」

「一夏に部屋に誘われたんだが……織斑先生に連れて行かれてしまったな。しかも戻ってこないから先に夕飯に行こうかと思ってな」

「あら、奇遇ですね。わたくしも食堂に向かおうかと思ってましたの。ご一緒にいかが？」

「いいだろう」

「では、参りましょうか」

セシリアは、特に不自然さを感じさせずにごく当たり前のように俺の腕を取る

そのあたりはさすが、イギリス名門貴族のお嬢様といったところか

そのまま廊下をわたって、階段を降りようとしたところで

聞

きなれた叫び声が聞こえてきた

「なっ！なななっ、何をしているか!？」

早足でずんずんとおよそ女子に似つかわぬ足音をさせて、
篝がやって来た

「あら、篝さん。これからわたくし達、一緒に夕食ですよ」

「それと腕を組むのとはどう関係がある!？」

「あら、殿方がレディをエスコートするのは当然のことですよ」

そうなのか？

「秋五も秋五だ！私が食堂で待っていたというのに、どういふことだ！」

「ふざけるな。超能力者じゃないんだ、分かるわけないだろうが」

「む……っ」

俺にそう言われると、ぐうの音も出ないといった感じで押し黙ってしまっ篝

そんな箒を尻目に、セシリアは俺の腕を引っ張っていく

「兎も角、わたくし達はこれから夕食ですので失礼しますわね」

「ま、待て！そういうことならば私も同席しよう。ちょうどこれから夕食だったのにな」

「あらあら、箒さん。一日四食は体重を加速させましてよ？」

「ふん、心配は無用だ。私はその分運動でカロリーを消費しているからな」

そう言えば、最近、箒が剣道部に顔を出していないと同じ部の女子が嘆いていたのを思い出す

……その運動時間を、少しは剣道部に回してやるといいんじゃないか？

「それに、実家からこれを送ってもらった。今日も後で居合いの習練をするから何も問題はない」

そう言って、箒が見せたのは、日本刀だった

「……緋宵か」

「うむ。かの名匠、明動陽晩年の作だ」

明動陽

女性剣士を伴侶としたことから『女のための刀』を作り続けた刀匠

そのコンセプトは二つ

『決して受けることなく剣戟を流し、また己が身に密着して放つ必殺の閃き』

『相手よりも早く抜き放ち、その一太刀をもって必殺とする最速の瞬き』

箒が持つている『緋宵』は、後者のコンセプトで作られている
刀身は細く長く作られ、鞘もそれに合わせて作られている
の
はいいのだが

「箒、超法的機関内とはいえ、あまり日本刀を見せびらかすなよ」

「わ、わかっている。……で、では行くとするか」

箒が、緋宵を仕舞い、空いている俺の腕に自分の腕を絡めてくる

「お前もか……」

「べ、別に構わないだろう……！」

「まあ、構わないが」

女子の考えることはよくわからんな

「……箒さん、何をしてらっしゃるのかしら？」

「男がレディをエスコートするのが当然なのだろう？」

「二人とも行くぞ」

俺が歩き出すと、引つ張られないように二人は横で歩き始める
そして、男が女を二人侍らしているというのは多分に目立つ訳であ
って

「ああっ、いいなあ……」

「両手に花ってやつね」

「幼馴染みってずるい」

「専用機持ちってずるい」

やはり、女子にとっては男にエスコートさせることは何かしらのス

テータスになるみたいだ
にしても……

「歩きにくい。……女をエスコートするのは大変だな」

「まあ、私のような美女をエスコートしているのですからこれくらいの苦労は当然ですわ」

「自分で美女とはな」

「何か言いました？ 篤さん」

「いや、何も言っていないぞ？」

俺を挟んで、二人が火花を飛ばしあって睨んでいる
最近、良く火花が見えるのだが、俺は疲れているのだろうか？
そんなこんなしているうちに、食堂に着いた のだが……

「秋五さん。今日の洋定食は半熟卵のカルボナーラですわよ」

「……そうだな」

「今日の焼き魚定食は鯖だ。美味だぞ」

「うむ……」

二人とも、俺の顔を覗いてくるたびに二人の胸が俺の腕にあたってしまう
故意なのか、故意じゃないのかは分からないが、こちらとしてはどうしていいかわからない
二人はこちらの思いとは裏腹にむにゅむにゅと押し付けてくる

「……そろそろ離れてくれ。食券が買えん」

「券売所まではまだありますわよ？」

「うむ、券売所までだ。そこまではしっかりエスコートしてくれ」

セシリアは兎も角、箒は完全にエスコートという言葉に酔っていた

取り敢えず、夕食は取れたが……精神的に疲れてしまった
女の胸は凶器だと、認識を改めた一日だった

暗い。暗い闇の中にそれはいた。

「……………」

何時頃からこうなのかはもう覚えていない。ただ、生まれたときにはもう闇の暗さを知っていた。人は生まれて初めて光を見るといすが、この少女は違う。闇の中で生まれ、影の中で生まれた。そしてそれは今も変わりが無い
光のない部屋で影を抱いて闇に潜み、その赤い右目は鈍く光を放っている

ラウラ・ボーデヴィツヒ

それが自分の名前だとは知っているが、同時にそれが何の意味も持たないことを理解している
けれど、唯一例外はある。教官に
織斑千冬に呼ばれるときだ

けは、その響きが特別な意味を持っている気がして、そのたびにわずかな心の高揚を感じていた。

あの人の存在が……………その強さが、私の目標であり、存在理由

それは一条の光のようであった。

出会ったときに一目でその強さに震えた。恐怖と感動と、歓喜に心が揺れた。体が熱くなった。そして願った

ああ、こうなりたい……………と
これに、私はなりたいと

空っぽだった場所が急激に埋まり、そしてそれが全てとなった

自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿
唯一自らを重ね合わせてみたいと感じた存在

ならばそれが完全な状態でないことを許せはしない

織斑一夏……………。教官に汚点を残させた張本人

あの男の存在を認めはしない。
排除する。どのような手段を使っても

そしてもう一人

織斑秋五。あの教官を教官で無くする男

それは要らない者だ。教官は絶対にして犯されざる者
そこに立ち入ってくるあの男を私は絶対に認めない

あの男も排除する。……………完璧な教官を取り戻すために
！

暗い闘志に火を付け、ラウラは静かに瞼を閉じる。闇と一体になり
ながら少女は夢のない眠りへと沈んでいった

「はー。この距離だけはどうにもならないな……」

「確かに遠いな」

学園内に男子（俺と一夏）が使えるトイレは三ヶ所だけである

一夏の言う通り、チャイムが鳴ったと同時に駆け出さなければなら
ない

まあ、一番辛いのはシャルロットで

「何故こんなところで教師など！」

「やれやれ……」

廊下では滅多に聞かない千冬姉さん以外の怒号に、俺は足を止めて
しまった

「秋五？」

「一夏は先に帰っている」

「ああ……。遅くなるなよ」

一夏を見送って、改めて曲がり角の先を覗いてみる
そこに居たのは、千冬姉さんと転入生のラウラ・ボーデヴィッツだ

った

「何度も言わせるな。私には私の役目がある、それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

巷では『氷の転校生』などと呼ばれているボーデヴィツヒがここまで熱くなることはそうそうないだろう
やはり、千冬姉さんが関わっているからだろうか？聞けば、ボーデヴィツヒが今の千冬姉さんの仕事について不満をぶつけているようだった

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「……ほづ？」

「大体、この学園の生徒など共感が教えるに足る人間ではありません
ん」

……言いたい放題だな。箒や鈴、セシリアが聞けば激昂して行ってしまうだろう

「何故だ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしている。そのような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど」

「そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……っ！」

低く、覇気を多分に含んだ千冬姉さんの声にボーデヴィツヒも流石に疎んでしまう

その言葉は途切れたまま、次の言葉が出てこないようだ

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「あ、私は……っ」

声が震えている……。相手は引退したとはいえ『ブリュンヒルデ』を名乗っていた世界最強のIS操縦者

千冬姉さんの持つ圧倒的な力の前に感じる恐怖は並大抵のものではない筈だ

「……さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……………」

声色を戻した千冬姉さんが急かし、ボーデヴィッツは黙ったままその場を去っていった

「その男子、盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

「……織斑先生」

「何だ？」

「……無理は、していないか？」

俺の言葉に、きよとんと目を丸くしていたが、すぐに、頭を撫でてきた

「無理はしていない。だから無用な心配はするな」

微笑みながらなでる千冬姉さんの笑みは本当に慈愛に満ちていて、俺は

「そうか。わかった」

としか答えられなかった

……まあ、本人が大丈夫というなら大丈夫だろう

「そら、お前もそろそろ戻らないと授業に遅れるぞ」

「了解した」

俺は、その場を後にし

教室まで全力疾走した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1806s/>

IS インフィニット・ストラトス 千冬と一夏と秋五

2011年9月16日19時11分発行